

55

60

65

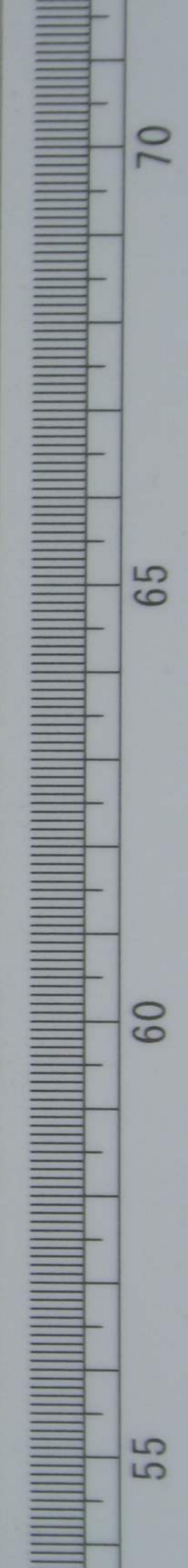
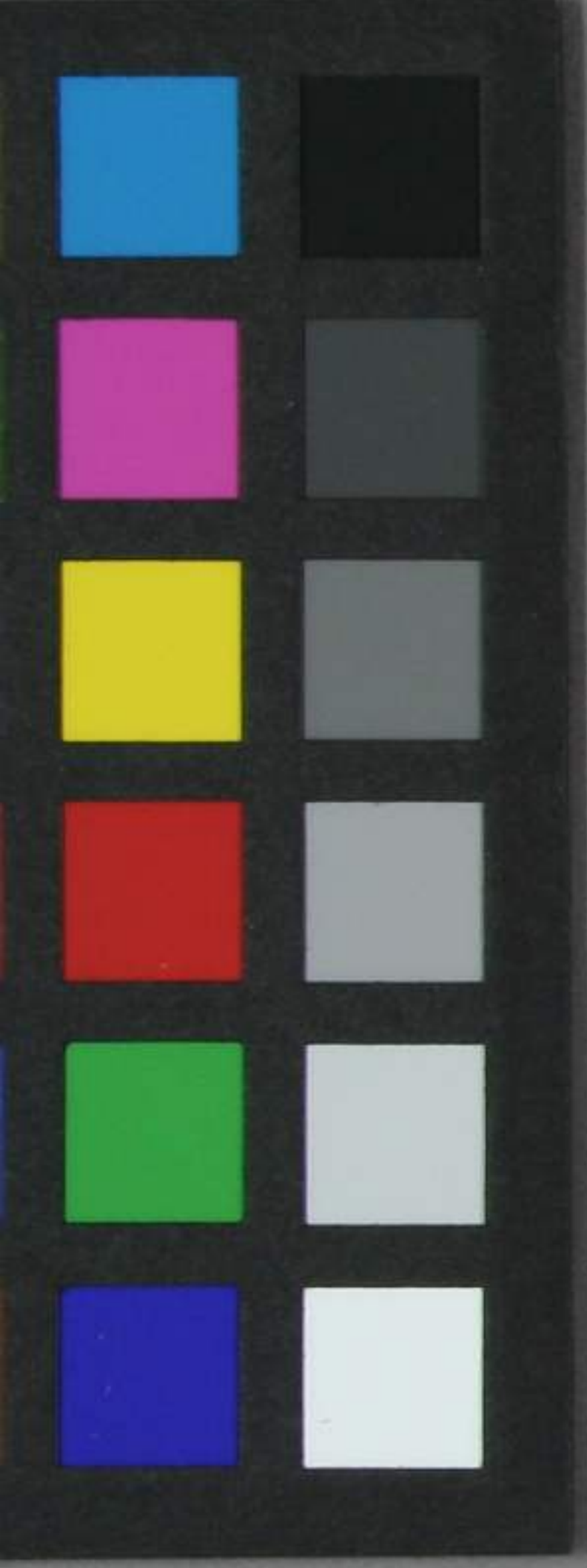
70

歸米

廿廿晚翠書

唱米

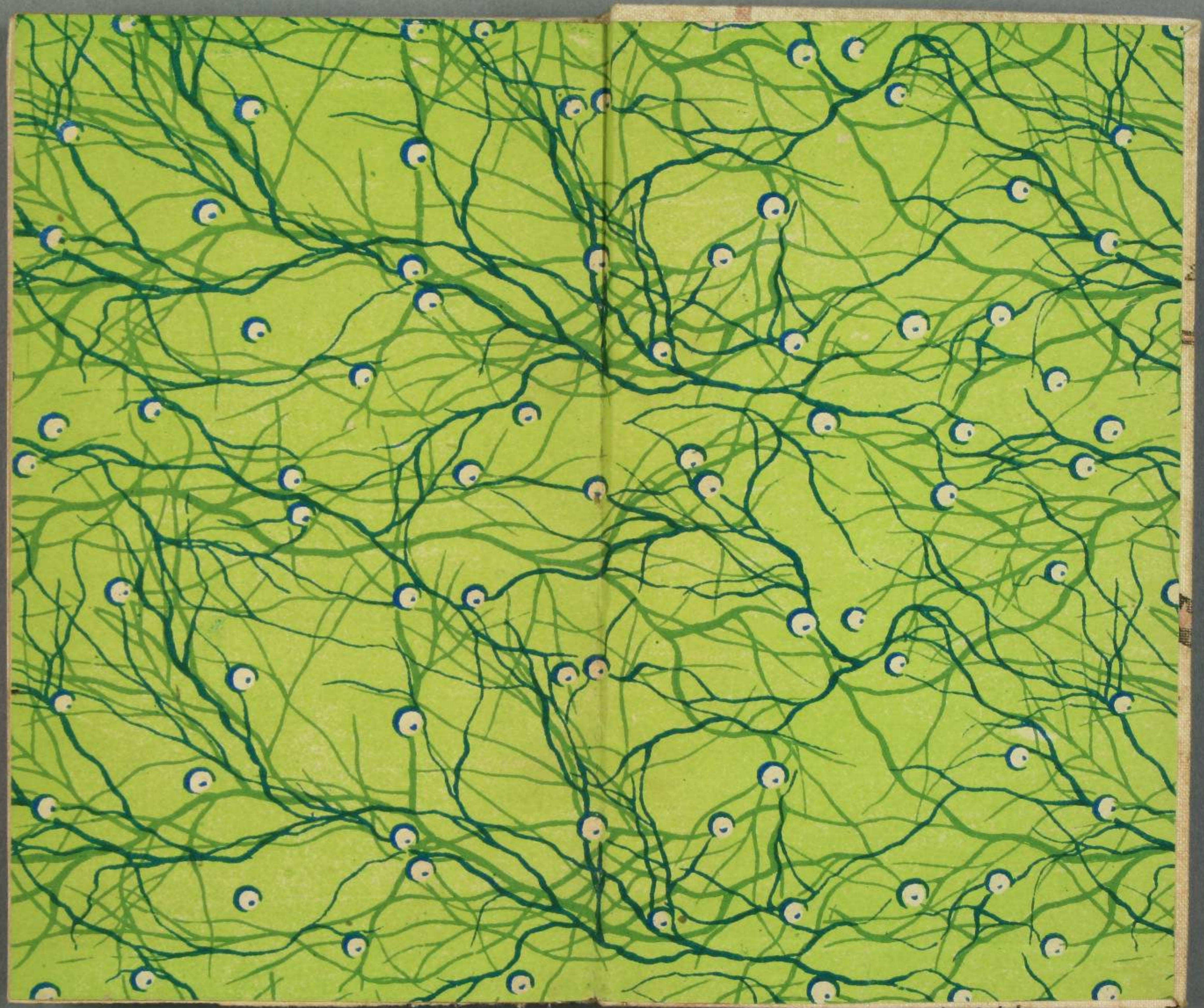
晚羽半指





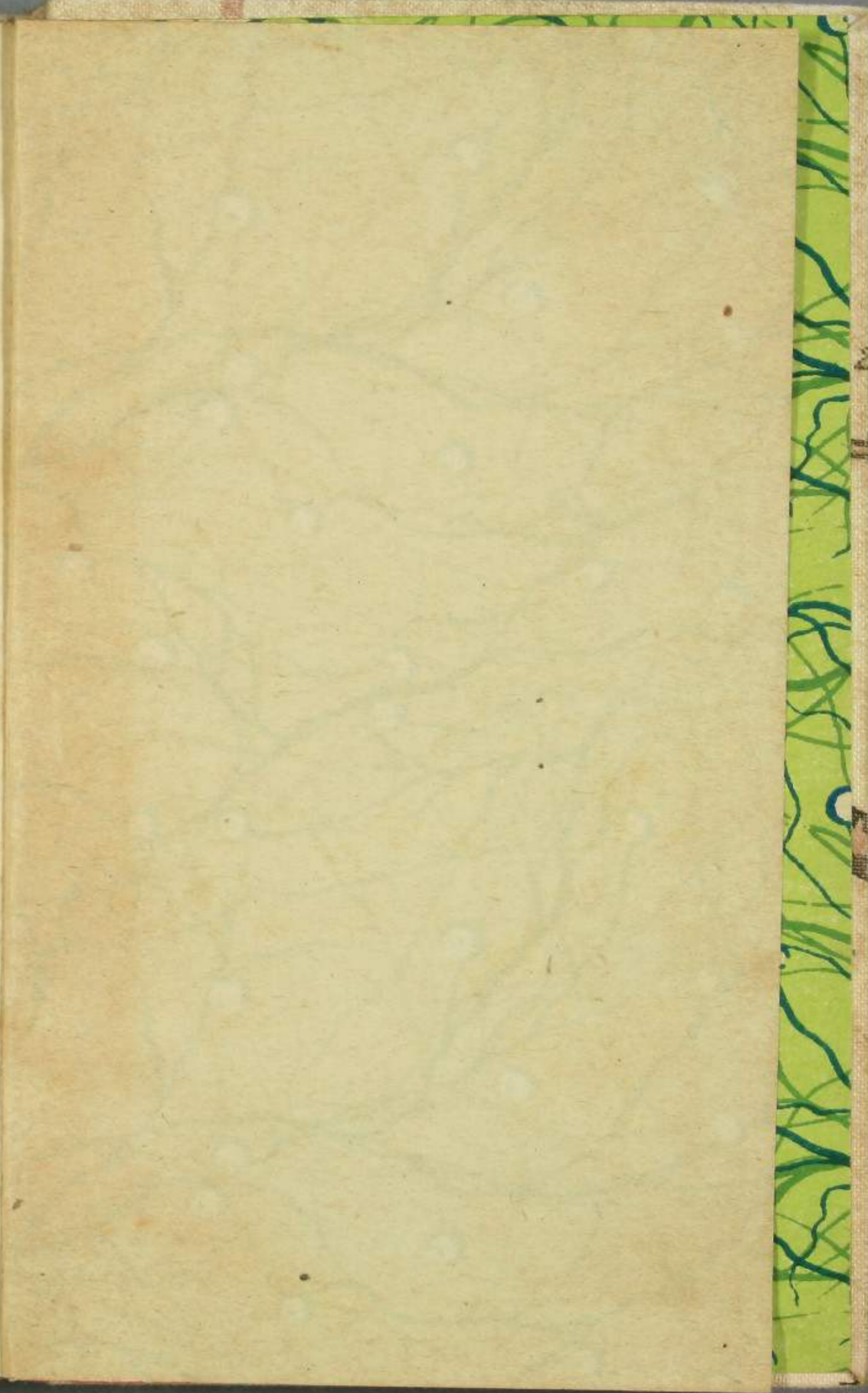
③





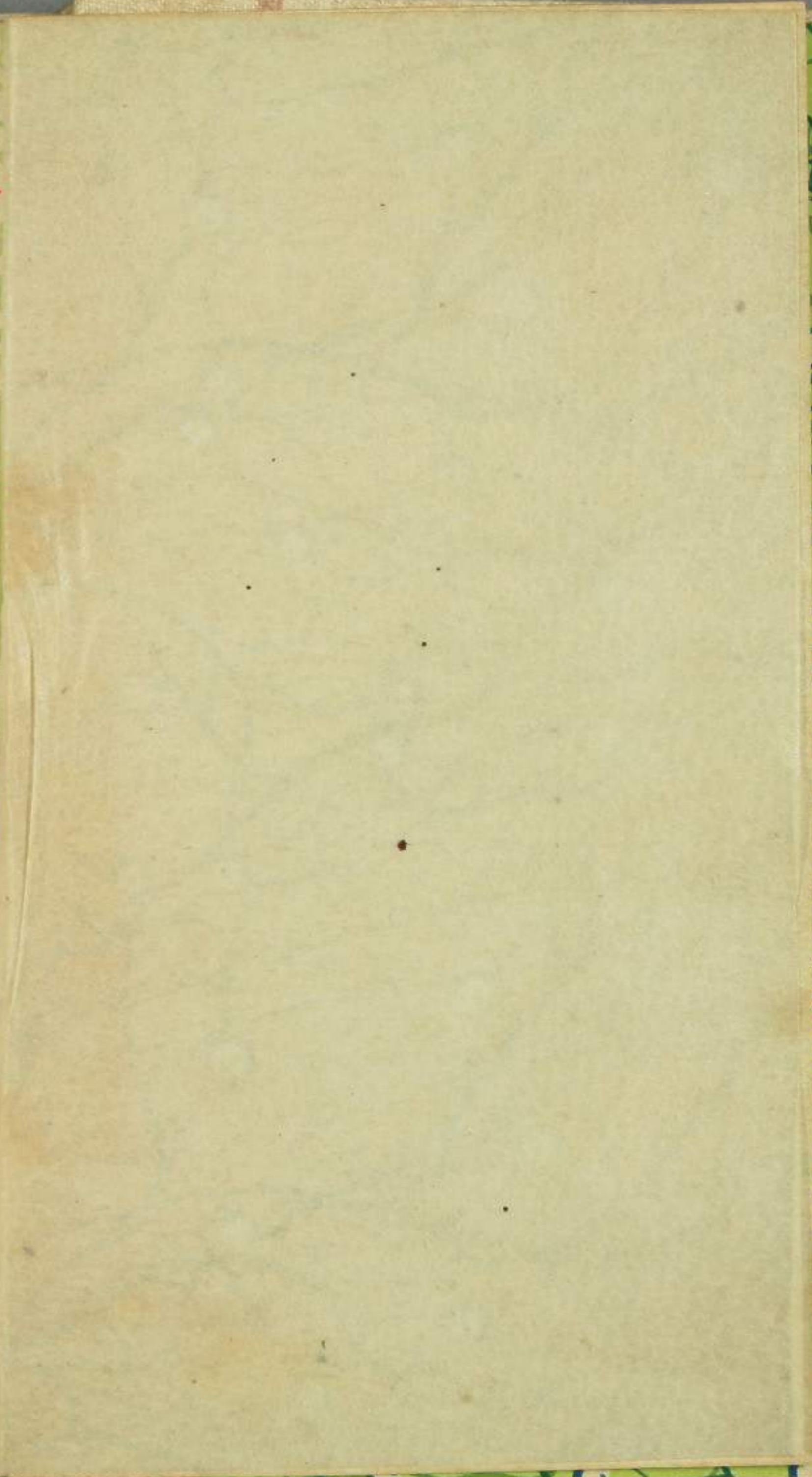
曙光

晚翠華



曙光

晚翠集



氣

四、光明の
 ころ
 眼るをみよ。
 いやきて
 早あぐる
 死くべし。
 好倭と
 たる
 ばしる。
 世を吸ふ處
 の意氣。

五、閩族の垣と呼ばれし不祥の名
 今こそ灑げ、赤門の
 健兒の意氣を心より歌ふ。
 六、世は移り、時は過ぎ行く、いつまでか
 意氣の青年閩族の
 奴隸となりて身を狭むべき。
 七、盛なり青年の意氣、此邦の
 望みなんちの雙の肩
 仰げば旭日十丈高し。
 八、大空にかゝる七の彩よりも
 いみじ地上の青春の
 新たな叫び、世は改る。

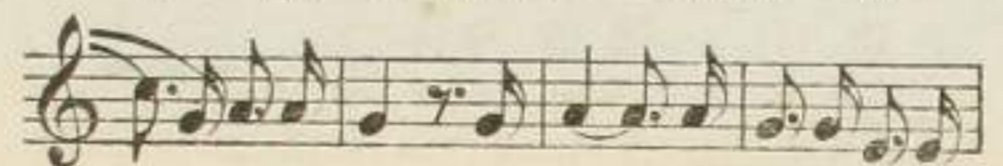
青春の意氣

歌作 土井 晚翠
作曲 弘田 龍太郎

力強



言論と思想の自由光



明のながれあまれく



布くところ 魑魅魍魎の逃げ



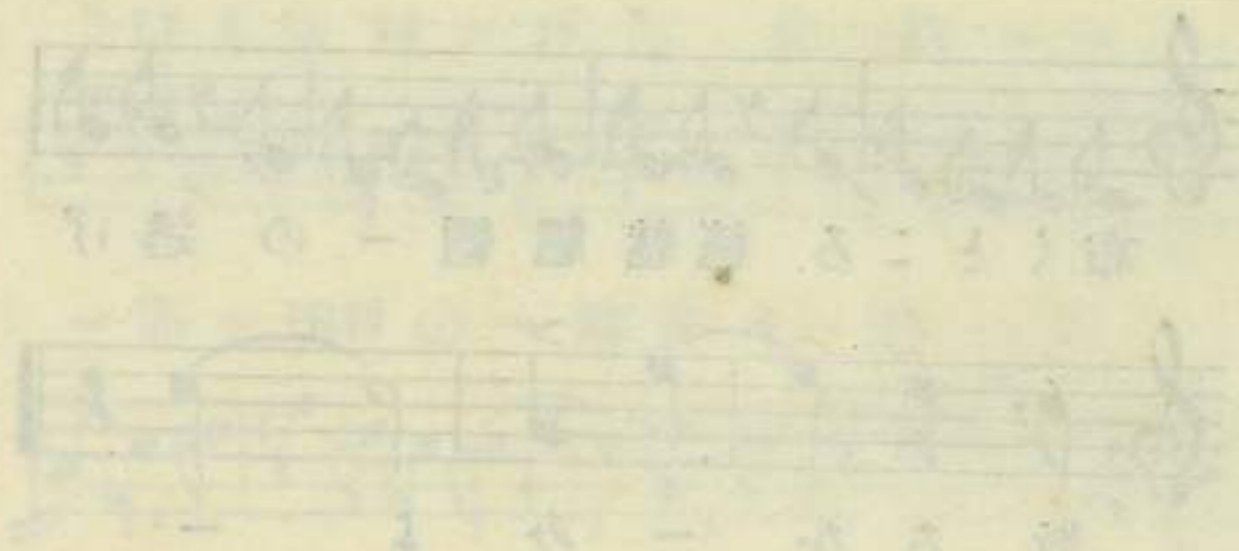
散るをみよ

青春の意氣

- 一、言論と思想の自由、光明の流あまれく布くところ
 - 二、その夕光燦爛とかがやきてデモクラシーの聲あぐる
 - 三、青春の意氣空も焼くべし。曲學と阿權と敵と奸佞と力あはして塞ぎたる
 - 四、世界思潮の波ほとばしる。あら嬉し、閥族毒を吸ふ處毒の獨國倒れたる
 - 五、閥族の垣と呼ばれし不祥の名今こそ灑げ、赤門の健兒の意氣を心より歌ふ。
 - 六、世は移り、時は過ぎ行く、いつまでか意氣の青年閥族の奴隸となりて身を狭むべき。
 - 七、盛なり青年の意氣、此邦の望みなんちの雙の肩
 - 八、大空にかゝる七の彩よりも仰げば旭日十丈高し。
- 此年見たり青年の意氣。
いみじ地上の青春の
新たな叫び、世は改る。

釋迦牟尼とトルストイ

五天の夜半星ひかる。——
 金殿玉樓——恩愛の
 ほだしの固き迦毘羅城
 あとに落ち行く王子の玉貌、
 眉間の白毫長く照して
 魔王魔障の群もひれ伏す、
 靈鷲の山高からず
 恒河の水長からず、



青春の意識

一、青春の意識は、
 二、青春の意識は、
 三、青春の意識は、
 四、青春の意識は、
 五、青春の意識は、
 六、青春の意識は、
 七、青春の意識は、
 八、青春の意識は、
 九、青春の意識は、
 十、青春の意識は、

高きは靈、長きは餘韻。
 末世今みな混濁の波の狂に
 金欄と紫衣と朱殿と幢幡と
 泥に汚れ塵にまみるも何かあらむ。
 流風とこしへに香を吐きて
 二千年前の大獅子吼
 今渴仰の心地に震ふ。

北歐のオーロラ微かに光る。
 人生八十終に近き

冥想の宿ヤスナヤ ポリヤナ、
 顧み見れば豪奢の青春、半醒の壯時、
 立たんとして立たず
 覺めなんとして覺めず、
 目は大空の高きを仰ぎ
 足は塵土の低きに這ひしも
 落日最後の光照して
 雲霧を今はの際にたち切り、
 五天のむかし二千年
 青春の王子王宮を

逃れしあとに遂にならへり、
嗚呼これ全歐最後の偉靈
世紀二十の文明の思潮の高みトルストイ。

金華山より太平洋を望みて

世界大戦争の初まりし大正三年の十一月一日中島、林の
兩教授及び科學部員二十餘人と共に金華山頂にのぼりて

(一)

太平洋の秋の波を見おろす一千五百尺
金華靈山の頂の風わが思を遠く吹く。

『王城去りて一千里、王化洽ねき東奥の
山黄金を奉つる』史上の聲は遠けれど、
隔つる波の荒うして名山未だ人界に
廣く知られず、神仙の府と想像の空にのみ、
たゞ雲霓の明滅を盲の思ふ如くして
此日此秋此年にわれ靈境の秘に參ず。

蒼鬱たりや千年の古木喬松枝しげく、
三峽の夜にあらなくに、哀猿耳を貫ぬきて

森より鹿の立つところ時に潺湲せんげんの水わたり
 喘ぎて上る羊腸の嶮路つくせば忽として
 眸ひとみにうつる渺々の水か鏡か太平洋。
 あゝ大なる太平洋
 干潮満潮互に月球の呼吸につれ
 大宇宙の莊嚴の曲の一律洋々の
 波浪と成りて帝國の岸を洗へる二千歳
 不死の仙郷秦皇の夢みし處はたこゝか、
 時劫の波は永く巻き黄金國の名に酔ひて
 西* * *の海客潮分けし其春秋も遠ざかる、

知は大塊のはて窮め理は幻樓を碎きさりて
 三山六鰲跡なきもおほいなる哉太平洋。
 赤道帯の南北みどりの波の幾千里、
 靺鞨の岸黒龍の水入る處寒潮の
 烟に月の眠る處貿易風の吹きあはる
 暖潮に魚の飛ぶ處時を同じく寒熱の
 季節の變を幾何か巨洋の浪は眺むるや。

日出づる國の東奥のこゝ今金華靈山の
天は正しく秋なかば、松の翠も満山の
紅葉の榮も一齊に皆白帝の世を語る。

青螺幾百、一灣の波しづかなる千松嶋
向ふ牡鹿の半嶋の山遮りて見え分かず、
こなた近くこなたの群嶋の蔭、人は曰ふ、月が浦、
一葉むかし南歐の都をさしし門出の地、
孤雲幾片悠々の空に泛ぶを望みしや、
其地其波其雲はむかし乍らの秋にして。

あゝ襟みりた正す肅清の秋の山また秋の海、
長く嘯なげふき天梯を攀のぼづるが如く恍として
大自然のふところところに休やすらふものは我か人か、
主観客観混まじとけて一切いっさい言句ごんくの領うりを去まり
塵骸ちんがいしばし太清の秋の光に涵ひたさるゝ。

(三)

さもあらばあれ空間の薄膜裂はくまくさかば夕陽の
落行く天の遠きあなた歐の中原戦雲せんうんの

渦巻きわたる悽愴の姿、日月また泣かむ。

痛しい哉百年の禍永く伏す處、

歐の東南ボスニヤの雲蒸す夏の六月の

空に運命の詛の手放ちし丸の響より、

西に東に大陸の表は修羅の市となり、

天上はたまた轟雷を飛ばす數群の大怪鳥けちやう

海上ひとしく鋼鉄の百の妖鯨火を吐けり。

リエーヅ、ナミユル陥りてチュウトンの族二百萬

颶風の如く霹靂を地上に驅りてあれ、狂ひ、

ミューズ、オアーズ、エーンヌの流のほとり聯合の

軍大波の打つ如く、東方更にガリシヤに

スラブの強兵數百萬、數も伯仲獨塊の

大軍ひとしく雄叫びて進退怒潮に似ると聞く。

江流秋に咽ふ時水は暗紅の悲みか、

落月雲より靨く時呻吟の聲たえくか

北地或は寒早く飛雪天地を卷く處

殺氣大荒に漲りて砲烟こほりて散らざるか。

あゝ黄金の巴里の首府、滿城綺羅の粧は
 今悉く憂愁の色に包まれ文藝の
 花も色なくうち枯れて只驚惶の影ならむ、
 ノートルダムノートルダムの聖塔は無慘の砲に傷きぬ、
 アンワリドアンワリドの墳の中百年の昔列國を
 敵に運命試みし英靈何の夢結ぶ。
 火山碎けて降る如き巨砲の猛威鐵壁を
 微塵となしてベルギイの假の都をつんざきぬ。
 海峽のあなたテームスの流を帯びて儼として

豪富に誇るアルビョンの大都も秋を感ずるや、
 リンデン樹下の逍遙も今は見はてぬ夢のあと。

(四)

遙かに想ふ、かんばしき『地上の星』の毒汁に
 枯死する如く歴代の精を集めて培ひし
 文化の華は戦亂のあらし忽ち吹き碎き、
 秋萬頃の豊かなる畑は屍體の收獲か。
 天の光明共に受くる無数のやから『民族』と
 『國』の名のため仇なくて仇と互に攻めにじり、

炎々の火に白蠟の熔くるが如く消去るか。

榴散彈の雨の下、影も留めず碎け散り

或は千仞蒼溟の底に白骨漂し去り

或は利劍の錆となり或は星泣き月ひせぶ

夜半に焼かれて青燐の寒さを残す牲幾萬

中に紅顔の春の盛、そらび耻らふ色あらむ、

生立ち行かば一世の光たるべき導も、

織らば錦繡の筆のあや、染めなば虹霓の影のにはひ、

或は學海底深く潜める眞珠探る身も。

其兵亂のくるほひの魔界の暗に似る處、
 泥土の中ににじらるゝ花の姿を思ひ見よ、
 流彈目なく胎の子と共に斃るゝ母あらむ、
 東西知らぬ幼子の四肢碎かるゝ慘あらむ、
 逃るゝものも一切の寶を宿を失ひて
 此嚴霜の鞭に泣き此慘烈の飢に泣く。
 それはた天か人界の正に受くべき運命か。

運命、爾の神秘なる被衣かつぎ誰かは剥ぎとらむ、
 東亞の空の運命の明日亦たれか測り知る。
 大戦亂の一波瀾太平洋に傳はりて
 渤海の岸青嶋に今皇軍の進む見る、
 孤軍外より援なき要塞程なく倒るべく、
 水は濃藍南洋の天亦光る旗とばむ。
 是より東洋日に多事に又甘眠の時あらじ、
 轟雷未だ聞かずとも既に閃電の火は映る。
 あゝ漫々の太平洋波は隔つる三千里、

金門峽の星の旗閃めく處秋いかに、
 西の隣邦人ありて今同文の秘を知るや、
 黒龍の水北辰の光は常にやさしきか、
 恒河五天の夕ぐれの秋澄みわたるいつ迄ぞ。
 機は風雲の變に似て形勢次第に推し移る
 其大局を玲瓏の心の鏡寫し得て
 經綸の策誤たず、二千餘年の帝の邦
 わが極東の光明を放て、——亞細亞の暗は足る。

嗚呼靈山の頂の秋逍遙のわかき友、
 その紅頬は豊かなる望の春の曙か、
 來る東亞の運命を双の肩の上荷ふもの、
 『列強の中、一流』の虚名に迷ふこと勿れ。
 野人自尊の醜さを自らさらすこと勿れ。
 爾の眼を光明に開き世界に知を探せ、
 黷と錆とを心より劍より拭へ、陋習の
 朽ちしを棄てよ、新たなる酒は新たな器に注げ、
 迷夢久しく妄影の身にまとわるを斬り拂へ。
 深きに入るは精に困り聖きを知るはたゞ誠、

四海あまねく照すべき偉大の想と藝術と
 科學となくば邦國の光榮遂に何の意ぞ。
 心靈の力盡くるなくおほいなるもの我にあり、
 起ちて世界の文明の潮新たに捲き返し
 太平洋の朝波に新たな歌を呼ばしめよ。

(七)

嗚呼金華山千歳の昔に聞きし黄金は
 今其胸に空しとも靈境永く靈ありて
 無聲の教、登臨の子にとこしへに施すか。

感謝を受けよ、名山の鎮むる處東海の
此邦永く愛すべく此民永く頼むべし。

秋や漸く深うして今満山のくれなるの
錦繡やがて雨と散り驚鷗空にうづまさて
萬物悉く枯れ果つる其慘悽の時去らば
春や再び回らざらむや。
雲今歸れ碧海の夕、
風今睡れ青天の限、
落つる日五彩の虹霓を染めて

烟波夢むる遠きあなた
大圓輪の影を隠すも
金波しづかに曙光に笑みて
光榮の太陽また明日を照さむ。

天皇の御代榮えんと東なる陸奥山に黄金花さく大作家持

支倉六右衛門羅馬に向ふ門出の港

マルコポロ以來歐人東亞に来るを曰ふ

ナボレオン

愛と哀

紫の雲のたなびき
 紅の霞のにはひ
 こなた暁光の生るゝところ
 こなた歡喜の湧きいづる郷
 こなた永遠のほゝゑめる空
 こゝに靈あり「愛」といふ。
 うす暗き狭霧のとばり

褪めはてし虹の面蓋
 あなた希望の消え行く處
 あなた涕涙の湧きいづる源
 あなた流轉のうなだるる空。
 そこに精あり「哀」と名づく。
 造化そもそも何の心ぞ
 無象の玉繩たまじやう天地にわたりに
 此の兩極の二靈を繋ぐ。
 見よ「愛」つねに「哀」にもなひ

「哀」とこしへに「愛」の影追ふ。

夜

一つの太陽隠れさりて
 千萬の太陽現はるる時、
 近きもの小さきもの浅きもの皆影ひそめ
 遠きものおほいなるもの深きもの皆出づる時
 大靈のあらし永遠の海をめがけて翔くる時
 沙漠の大獅子鬣に露を亂して覺むる時
 心海の波浪しづまりて大聖曙光を待ちわぶる時

千萬のまぼろし飛びて詩人を廻る時
 あゝ夜よ、玄妙の精、何の言葉に君を讃ぜむ。

雨滴

わが心臓の脈搏に
 答へてこよひ檐の玉水
 しらず何等の有韻の歌ぞ、
 天地を包む暗の胎より
 來りて去りて不可知に到る
 世々の惱の數とや、なんぢ、

もしくは億劫久遠のあなた
救はれ天に再び生る
サタンの感謝の涙かなんぢ。

冥府の白薔薇

光に遠きよみの底、
憂のあらし、恨の風、
望のうしなひ、つきせぬ惱み、
魂みな焰の泥の海に
鐵の鎖につながれて

苛責の鞭に泣くところ
見よやけはしききりぎしに
ましろき薔薇の花さけり。

あゝ白さうびさきにはふ
望のあけぼのほのみえて
あゝ戀の花さきにはふ。

『サタンは冥府に消え失せぬ
いみじ再び光の子』

ルシファ天に生れいでぬ
喜びあれよ『億劫の
未来の遠きあなたより
あゝ君さかずや洩れくる聲を。

亡國の恨

「冬王」の威嚴のはじめ
満山の過ぎし粧ひ
錦繡の榮を誇を
一場の夢とし拂ふ

すさまじの風のあらびを
惨悽の思に聞きて
聯想はセルビヤの惱の上に。

亡國の四百萬人
逃るるはいづこの谷ぞ
隠るるはいづこの山ぞ
一片のパンを争ひ
同胞の血汐流して
獸性の狂ひを見する

現實の冥府の苦惱。

ベルグラード月黒し

ニツシの空雲悲し

啾々の夜半の叫び

哀々の野末の咽び

昨日は花、今日は荆棘

先は玉樓、今は破滅、

大靈の光の前に

人間はかくも苦しむ。

東海の萬里のこなた

亡國の恨を想ふ

一片の心のいたみ

こがらしの夜半のひびきに

窓押せば天の萬軍

永遠の神祕の謎

星は皆またたき震ふ (一九一六)



警めよ

- 心せよ『焦眉』の言葉あまり鈍し、搏撃近し三千里、寸時に怪鵬南に翔けむ
- 銀座街一萬の家、十萬の人と寶と一聲の、天魔の彈に碎けし夢よ
- 想ひ見よ天魔の叫び、百團の焰と化して極東の、滿城の春に落ちかゝる時
- 飛行機の定義下さん、歐米の空に飛ぶもの、極東の空より落ちて木にかゝるもの

天魔

- ウラル山越して毒吐く獨探の、群むら雲のごと寄せ來る、さめずや東亞未曾有の危機に
(一九一八、二月朝報)
- 樂園のパリに豪華のロンドンに見よ天上の大魔軍
焦熱地獄また湧かしむる
- 對岸の火とおろかにも眺むるや
霹靂飛びて一瞬に
關八州を焼かん日想へ

○天睨み齒をくひしばり足摩りて

怒るも遂に遅からむ

百の雷霆鳴り落つる時

○頼めりや頼むまじきに、シベリヤの

大平原をまつかうに

毒煙毒霧吹きよせ來るに

○高樓の歌吹の海のたゞ中に

猛焰猛火猛雷の

ひゞきと共にふることあらむ

(一九一八、三月)

危機

○樂園のバリの郊外襲ひ來る、大爆彈のとどろきよ、

ああセイヌ河波しづけきや

○鋼鐵の長蛇の陣を布きかため、ソナムの岸にチュー

トンを、マルヌの如く攘はんはたぞ

○ナポレオン旭日あさひの如く榮えし日、その亡びんを豫言せ

し、ワイマア侯に倣ふべし今

○聲のみはあらしの如くよもに飛び雄々しかりしよ

三萬の、飛行機いかにあはれアメリカ

○元帥のヘイグ——アングロサクソンの誇り、世界の見
るところ、怒潮と寄する敵打ちはらへ

(一九一八、四月
萬朝報)

長太息

- (一) 鴛鴦の契短く濃艶の
花時ならず碎くると
暮雲色なき夕に聞くか
- (二) 櫻咲く郷を踏まじと叫び去る
中華幾千青春の

- (三) 血を湧かしむるたが咎ぞや
毒弾と毒瓦斯使ふ人々の
無形の毒はいやまして
- (四) こゝに大和と支那とを隔つ
楊柳の渡に東かへりみて
悲憤の涙同文の
邦な詛ひを意馬の狂くるひに
- (五) 江陵の一夜の雨としぐる、
東海さりて一千里
客衣につゝむ憂の雲は

(六)

大息を何に托さむ極東の
百年の策日と支の

(七)

唇齒睦まで何によらむや
極東の經綸の策千載の
危機にあたりて謹めよ

(八)

血は水よりも濃しと知らずや
四百州日ららゝかに空青く
東亞むらがる妖雲を
拂はん風の吹くよしもがな

(一九一八年五月
萬朝報)

歐洲戰局詠

巨大なる偶像倒る。——昨日まで

北の寒光歐に亞に
あびせし畏怖の的いづくぞや

○ ペートルの起りこのかた二百年

○ 歐亞にわたる巨大なる
邦か沙上に建てし堂宇か

奸佞のたくらみ世々の禍を

積み来て斃る忽然と
心の腐れし巨木の如く

○ 奸佞の賊徒おのれの威をたのみ

威を固むべく蒼生を
おろかになせし罪惡のはて

○ 國敵は潮と寄せて百萬の

民は飢寒に亡びゆく

○ 現世げんぜの地獄ペトログラード

一億の罪なき民を顧みよ

過ぎし百年蒙昧の
暗に蔽はれて邦今亡ぶ

○ 敵軍の間諜影を潛まして

玉座にありと人間の
いづれの歴史さきに述べしや

神聖の玉座四海をおほふべき

威のよるところ忽然と

民の怒に碎け散る見よ。

○ 大悲劇新たに綴るソホクレス

九泉の下さめいでよ

○ ロマノフ朝の世々の詛を

國を賣る秦檜の靈冥府より

立ちてウラルの嶺こして

レーニンといひトロツキイといふ

○ ひんがしの巨像倒れてチユートンの

兵二百萬引きかへす

○ 西の風雲今正に暗く

○ フランダー固めし山河おほひくる

黒雲あつく電光に

○ 伴ふ雷の音すでにひびく

百年のむかしフランス身ひとつに

聯合軍と戦ひて

夢と覇業の消えしほとりぞ

シヤムバニイ百里にわたる砲陣の

咆哮まさにはじまらむ

日月いたみ風しばし黙す

時移りいくたび替る運命の

潮ぞ——北のチュートンの

猛威しばらく今われんとす

東方の武の聖經は奸雄の

目にまだ入らじ——やがて見よ

『百戦百勝國亡ぶ』理を

(一九一八、四月
合雑誌)

血潮の狂ひ

左の一篇はシラが「ワーレンシュエタイン陣營」の結末に於て大將軍の部下に歌はしめしもの、「三十年戦争」當時の面影

はた現時獨逸軍の荒べる心正にかくの如からむ。

一、いざいざ 同胞わが馬驅らむ。

いざいざ 戰場自由の郷に、

戰場たゞ見る男子のしわざ、

猛なる心ぞかしこに躍る。

健兒に代るははたして誰ぞ、

あ、彼たゞ身を頼みて立たむ、

合唱 健兒に代るははたして誰ぞ、

あ、彼たゞ身を頼みて立たむ。

二、自由はこの世を逃れて去りぬ、

三、

残るは君王奴隸の二類、

怯れしともがら恐の群に

力を振ふは虚偽はた詐謀、

たゞ死に面を合はして恐ぢぬ

勇卒のみわが自由のやから。

合唱 たゞ死に面を合はして恐ぢぬ、

勇卒のみわが自由のやから。

現時の苦辛は抛ち棄てぬ、

辛勞恐怖の影今とめじ、

運命めがけて馳せ行くわが身、

四、

今日もしあはずば明日はた逢はむ、
 運命あしたの身に逢ふべくば、
 命のうま酒今日こそ酌まめ。
 合唱「運命あしたの身に逢ふべくば、
 命のうま酒今日こそ酌まめ。
 楽しき幸運天より下る、
 辛苦の勵みは無用のしわざ、
 大地の胎より寶を求め、
 寶をあさるやみじめの農奴、
 生ある限を穿ちて掬ひ、

五、

やがては己の墳墓を穿つ。
 合唱「生ある限を穿ちて掬ひ、
 やがては己の墳墓を穿つ。
 駿馬をかりくる雄々しき勇士、
 あゝ此賓客「恐」を率ゐ、
 燭光目ざして婚賀の席に
 呼ばれず請はれず強ても寄せつ。
 甘言用ひず黄金見せず、
 あらしの最中に落花をにじる。
 合唱「甘言用ひず黄金見せず、

六、

あらしの最中に落花をにじる。

少女よ悔しき涙はなぞや

とくく、遠くに我こそ立たぬ、

休はとこしへ地上にあらず、

誠の戀はた守るは難し、

はげしき運命勇士を驅りぬ、

平和はいづくの郷にもあらじ。

合唱「はげしき運命勇士をかりぬ、

平和はいづくの郷にもあらじ。

七、

いざさは戦友馬上に進み、

劍火の狂に其胸さらせ、

青春湧きたつ血潮の誇、

立たずや雄心冷えざる中に、

なんぢの生命賭くるをなさで、

いかでか誠の生命あらむ。

合唱「なんぢの生命賭くるをなさで、

いかでか誠の生命あらむ。

エルエーレンの『祖國の破片』

(白耳義大詩人の最後の詩集「戦の赤き翼」より)

はて無き世界のたゞなかにこれ唯小き一片の地、
 これこの北の地
 膚をつんざくあらしを孕む、
 これ海原を界とし目の前不毛の野の布ける
 小さき微けき地球の破片。

あゝこれ尺寸、大地の一塊
 さもあれ今なほ君王王妃
 はたまたかしづく民の愛
 残り、嚴冬氷霜などや、

すぐれし此郷猛火に狂ふ。

その君王の威によりて幾團の勇士泥濘の
 塹壕の中すみよりすみに

武名を揚げつ、

はた大水の漲り溢るリゼール淀みて

昨日迄林檎花さく枝の中

鳥の巢くひし果樹園を今一面の海と化す。

ヂスミユウド又その砦、ニイポール又その運河

炬火に類せる高塔を含めるフルーン
 あるは猶ほ生き、或は又霰彈の雨に碎けぬ、
 あゝ天軍の天翔けるあとと眺めし蓬々の
 白雲飛べるフランダの碧の空。
 誰れかなんぢに戦雲のみなぎる今日を測りしや。
 なんぢいみじき大空の下に光榮また悲哀
 かはるゝに現はれまじる、
 あゝ一團の神聖の名ウルベン、ベルキズ、ラムカペル、
 なんぢの鐘樓の傍に巨大の墓の中にして
 猛威猛勇戦場にふるひし勇士今眠る、

生ける間めでし郷土今親しく彼等を招き呼び
 屍を包む白衣無く納むる棺を缺けりとも
 祖國ぞ愛の抱擁に彼等の骨を葬れる。
 その墓標の十字架の間歩みをめぐらして
 光榮の昨日千代ませと彼等讃ぜし皇后の
 宮こそ衣冠整へて逝きし勇士のため祈れ、
 あゝさびしの姿つゝましげの影
 思に沈み佇みて、斯くて夕ぐれ迫る時
 砂原さして悄然と暗の深みに消え給ふ。

又こなたには聖徒の再生わが君王、
歴史の今成る場より出でて

泥濘深き悽慘のリゼールの岸おとづれつ、
等しく默然思に沈み、手勢にまじり一齊に
曠野わたりて海近き
さびしき館にさり給ふ。

あゝフランダドつらく、さびしく物すこく
爾の生ける姿はかくぞ、

光榮竝に其火焔、悲哀ならびに其灰の
たゞ中なんぢの生けるはかくぞ。

更に増すことあり得じと

思ひし愛に昨日こそなんぢめでつれ、今にして
あゝフランダド一艱難の中になんぢに伴ひて
なんぢにはべり冥宮の領の界にいたるまで
續く無邊の熱情の湧くを我こそおもほゆれ、
しかも今こそ妄念と悲憤の日なれ、わが心、
なんぢの不幸艱難のさらに増せとし祈るまで、
命を牲にいや深く更になんぢを愛でんため。

無韻の哀歌

世界大戦に参加し、地中海方面に遠征したる、我帝國艦隊の戦死者の記念すべき墓碑は、豫てマルタ島に建設中なりしが、四月三十日、靖國神社大祭の日を卜して納骨式を行ふ旨、佐藤艦隊司令官より報じ來れり。

シシリイの南 波捲く 濃藍の
光を返すマルタ島
やまとますらを 其の骨埋む

地中海 怒濤の中に 東海の
やまとますらを 動を
残し マルタの島に眠れる

アフリカの岸の北なる千重の波
波の鼓樂を夜に日に
聞くや眠るや やまとますらを

イオニヤの海の潮風 東より
寄するマルタの島の塚

故山の夢はありや通ふや

マルタ島 土と やまとの丈夫まさらは

化しぬ 之れより此の里の

薔薇 いよいよ香は高からむ

マルモオル アラベスタアを刻みなし

友のかたみを 遠征の

將士泣きつゝ マルタに建てむ

地中海 波靜かなる夜半よの空に

汀の薔薇香を吹きて

無韻の哀歌 勇士にたむく

濃艶の色彩 なかば熱帯の

花と空とを色彩らむ

其の島染むる やまとの血潮

東海の霞む波間を わけいづる

暮春の月よ 三千里

光を送れマルタの塚に

成るべくは 大和の櫻苗わけよ
薔薇と共に ますらをの
マルタの塚に 永久とわに咲かせむ

マルタの發音正しかられど、暫く世間に倣ふ。又た薔薇、マ
ルモオ、アラベスタアは、同島の特産なり。

河内艦

六百の國の干城火に焼かれ

水に溺れし周防灘
波よたがため今日緑なる

火に焼かれ水にさらはれ六百の
ますらを逝けり極東の
風雲ふううんあらび行く時にして

魔を碎き妖をしづむる鋼鐵の
生ける堅城忽ちに
六百の魂ともに亡ぶか。

生き残る壯士泣きつつ丘の上
たなびく茶毘の烟見る
よべはハンモク觸れ合ひし友。

國に仇なすべき敵に備へたる
猛火の藥我とわが
國の干城斃ししぞ憂き。

忌はしき世の疑よ空しかれ

扶桑千載何處にか
國をうらざる賊を容るべき。

周防のうみ徳山灘の波あらく
六百の靈亡びしよ
艦は造らばまた作るべき。

レピンを憶ふ

レピンは現代最高の畫家の一人其作は世界的有名なるもの多し、過ぎし日饑に倒れしといふ。

崑山の焼けて珠玉と頑石と
共に亡びし跡や斯く
あゝ革命にレピンも斃る。

天上の虹霓の色溶かし來し
巧は饑を補はず
あゝ名工は食無くて逝く。

旅順口「エレスチャーギン」水雷に
碎きし恨深かりき

今はたレピン饑ゑ死なんとは。

大倭瑞穂の邦に米無しと

叫ぶ動亂彼にして

大露の騒レピンは饑ゑぬ。

ザアは銃にレピンは饑に俱に逝く

革命の波何物も

洗はずしては止むべからずや。

「帝王」の囚はれ「寫し」牢獄の
恨み盡さし君にして
糧なき故に今逝かんとは。

「召集」の兵の別れ「に斷腸」の
思寫しし一時や
君戰亂の餘殃に逝くか。

秋立ちて今宵西窓雨暗く
檐のしづくも思あり

レピンの饑ゑて逝けりと聞けば。

太平の世にしありせば沈む時
五彩のほひ榮光は
夕日の如く照るべかりしを。

ロマノフの滅び

大悲劇セイクスピアとソホクルス
二人の筆を合せ得て

(一九一八年)

「帝王」の囚はれ「寫し」牢獄の
恨み盡さし君にして
糧なき故に今逝かんとは。

「召集」の兵の別れ「に斷腸」の
思寫しし一時や
君戰亂の餘殃に逝くか。

秋立ちて今宵西窓雨暗く
檐のしづくも思あり

レピンの饑ゑて逝けりと聞けば。

太平の世にしありせば沈む時
五彩のほひ榮光は
夕日の如く照るべかりしを。

ロマノフの滅び

大悲劇セイクスピアとソホクルス
二人の筆を合せ得て

(一九一八年)

描きいづべし、ロマノフの運。

冬宮とうきやうの誇、金殿玉樓の盛ひととき一時

天上の花吹き散りし

ロマノフの夢。

北方の生ける神祕と極みなき

威嚴と兼ねしロマノフの

最後の姿血に染み倒る。

あゝウラル、夏や淋しき、紫の
ころも珠玉の冠を
嘗ては着けし屍俯伏す。

萬乗の尊き棄てて、百億の

富失ひて、ロマノフの

最期、ウラルの夏暗き空。

ウラル山、麓の夏の空暗く

静けさ破る銃丸の

音にニコラス二世は倒る。

皇天の愛の眸は何と見る

過去の百年悪政の

罪の報にたふれし子孫。

洪水の逆捲く姿、あれ狂ふ

猛火の姿、民衆の

怒の前に何ものか活く。

黄金おうごんの冠をすてし昨日より
危み見つる運命の
はやもウラルの麓に盡くる。

富に威に權に神祕に、何ものか

敢て比へし、今にして

見れば頭に積みたる薪。

黄金の冠戴く身のつらさ

悟るもすでに遅かりき

野狐ヤコに其威を借られしも憂し。

ニヒリスト、アナキストの究竟の

理想も遂に及ばざる

現實、斯くと誰想ひしや。

牝鷄のあした告げしは魔の叫

さらぬも重き積悪の

報、かくこそあるべかりしか。

啾々の恨陰いん靈霧れい深き

朔北の野に詛ひしか

あまりにむごきロマノフの末。

二十世紀、そのいやはじめ黒龍の

流五千の支那の子の

溺れし魂の恨もあらむ。

ネワの岸、雲に聳えし百尺の

高樓、遂に何のかひ

殘骸蓋ふは土の六尺。

ブルボンのルイ十六の運命を
共に比へむ、火の如き
民の怒に流れし血汐。

大領土、歐亞にわたたり、一億の
民を治めし王朝の
またたくひまに蠟と熔け去る。

其蠟を熔かす何もの、百年の
罪の報と、敵し得ぬ
世界思潮と、民の怒と。

『恐あり、恐多し』と詐りて
民の怒を激したる
宦官の罪ウラルに見たり。
(一九一八、八月
東方時論)

友工會々歌
(仙臺高等工業學校
土木科の需によりて)

(一) 無形の連鎖人文の

ひろがる處其はしの
有形の途を開く任
嗚呼青春のかどいでに
勉めよ健兒學藝の
嶺また嶺ぞ末遠き。

(二) その嶺のぼる一團の
友いまこゝに人生の
光まばゆき朝ぼらけ
つどふ五城の樓の下

盟はむ昇る東海の
旭日の邦に盡す身と。

(三) 幽蘭咲きてかんばしき
花をかゝみに睦み合ふ
同じ窓なる友と友
見ずや大空ひたす水
深きにはたすわが業も
愛と愛との胸つなぐ。

(四) 青葉みどりの色深く

流廣瀬の岸にして

高き遠きにあこがるる、

土くれ積もる果を見よ

銀浪山と崩るゝも

もとは谷間の幾しづく。

(五) 三年とせの後は西東

いづれ別るる恒山の

四鳥の途は替るとも

替らじ盡す身の誠

友工會の名のほまれ

思へ嗚呼友わが責と。

五城寮々歌(在京仙臺學生の
求めに應じて)

建國このかた無雙の我世

國運いづれの肩にか乗らむ

知らずや東北天地の秀氣

雲蒸久しく時待ちきしを

青春わが世の花なる盛り

故山のおとづれ語らひ睦ふ
健兒の一團やどれるわが舎。

風雲いくたび東亞の空に
これより荒ぶを誰かは測る
あゝわが東北強者の故郷
なんぢの使命の重きを知るや
その精その英その髓たれと
ひそかに望みてあしたを待てる
健兒の一團やどれるわが舎。

圖南の鵬翼風まぢわびし
英魂なほ住む五城の夕
廣瀬の清流宮城の錦
鹽松金華のほまれの山河
人文ひとしく榮えもゆけと
故山を思ひて夢また似たる
健兒の一團やどれるわが舎。

尙綱女學校々歌

橄欖山の夕ぐれの

歌いま遠し二千年

山さくるとも揺なき

愛と望と信の道

きよき教の御ひかりを

こゝに八洲の東北

大和なでしこ姫百合の

花に蕾に浴びしめよ。

金華松島鹽釜の

ゆかりの郷の春と秋

色もにほひも大能の

御手のたくみのあとと見て

酌めど盡せぬ意を探る

身は清曉の露含み

浮世の塵をよそにして

風に香を吐く白そらび。

青葉廣瀬をまのあたり

『錦うがちて綱尙ふ』

深き警め心して

教の庭にいそしめる
嗚呼わが姉妹知を集め
操をみがけ、あめつちの
神の御榮あらはして
道と邦とにつくすまで。

木更津中學校々歌

遠く富嶽を西にして
東京灣をまのあたり
わが木更津の中學に

健兒幾百青春の
心と身とを練りきたふ。

激浪山とさかまくも
もとは谷間の幾しづく
日々の歩みのつもり行く
千里の道を顧みて
あゝ紅顔の子よ奮へ。

東亞これより風雲の
あらびあらじと誰が曰ふ

健兒わが成るあしたの日
廣く四海を家として
邦と道とにつくさでや。

剛健の徳破邪の意氣
つねに進みて怠らず
明鏡塵を絶つ如く
心の光照らしめて
永く理想のあとを逐ふ。

北野中學校々歌

(一) 六稜の星のしるしを
青春の額にかざし
紅顔の子弟幾百
日に通ふ北野中學
(二) そのむかし難波御堂に、
堂島に次ぎて北野に、
育英の門を開きて
四十餘年花は薰りぬ。

(三) 淀川の深き流よ、

六甲の雲ゐる嶺よ、

名にし負ふ大阪の城

天才の高きかたみよ。

(四) 天然とはた人間と、

とこしへにわれの龜鑑かんがみ

眺むるも胸のときめき、

嗚呼友よ奮はざらめや。

(五) 大東の邦の運命

青春の肩にかゝれり、

あゝ母校北野中學

その健兒勵まざらめや。

函館中學校々歌

玄冥の北の一道

關門の岸にのぞみて

青春の薫にしるく

基おける育英のには。

つどひ寄る五百の子弟

人生の花のほころび
身を鍛ひ心をねりて
向上の一路をたどる。

宇賀の浦萬頃の水

駒が嶽千仞の山

微をつみて高きにいたり
滴より空をも涵す。

形ある無言の教

仰げわが紅顔の子ら
業成らば雙の肩のへ
此國の運も負へかし。

母校の名子弟のほまれ

花と香とつねに伴ふ

任重く道遠きを

あゝ健兒勉めざらめや。

宮城女學校女子青年會々歌

一、

天に榮光
 地に平和
 人に恩寵
 あげくれに
 祈る尊き
 御教の
 光を仰ぐ
 姉妹。
 あゝ曙よ
 光明よ

三、

春よ望と
 愛と信
 嵐も雨も
 叢雲も
 われには示す
 明日の晴。
 わが名にし負ふ
 宮城野の
 錦の郷に
 日々に織る

四、

あやを心に
 粧ひつつ
 聖なる業に
 いそしむ身。
 鳩のやさしみ
 清淨の
 操みどりの
 橄欖の
 色はとこしへ
 人の世に

神のほまれを
 あらはさむ。

科學の光

(新短歌十六首)

乾きたる味なきものと朦味の
 眼まなこや眺めん詩のかほり
 美のあや充つる科學の世界
 ○
 赤熱の金輪めぐり炎々の
 火焰のつむじ吹き捲きて

萬劫の後薔薇花咲く(地球に於ける有機物發生の歴史)

○
アミイバの小さき命の一つだに

太陽系統千萬の
年の進化を待たで成らめや(同上)

○
テーブルの上に迷ひて行く道を

○
蟻失ひぬ、大漠の
千里さまよふ旅人の姿。

二吹の烟草の煙窓ぎわに

悠々としてたなびきぬ

暮山に歸る雲の姿か。

○
青葉山青苔あつき岩の下

巨鯨の骨を掘りだしぬ

○
幾萬年のむかしの海ぞ(發掘は東北理科大
學の手によりて)

○
金華山沖のあなたに鯨鯢の

群こそ遊べ、そのむかし

青葉廣瀬も大海にして。

想像の力及ばし幾萬の

春秋去らは青葉山

大空涵す海に返らむ。

そのむかし鹽釜の浦千松島

影いかなりし萬仞の

嶺か千丈緑の底か。

小宇宙宜べし其名よ億萬の

原子群がり極小の

恒星遊星みな備はれば。

『無限小』大と等しく詩を含み

美を莊嚴を玄妙を

兼ぬるをいまだ歌ふ人無き。

おほいなるアリスターカス太陽を

大地廻ると照し見ぬ

二千二百の遠きいにしへ (西曆前三世紀
ギリイヌの人)

羽あらば登らばいかに天界の

姿いみじく目をうたむ

恒沙の数の星みな詩なり。

一秒に百里を走る速さもて

十六萬里火の雲は

わが太陽のおもより飛びぬ (太陽のプロミネンス四十
萬英里に達せし事あり)

天狼の緑を凝らす光見よ

大日輪を千あはす

巨大の星の震ふ光を (シリアスの容積
太陽の一千倍)

ヤペタスの衛星の夜より眺め見る

土星の姿いかならむ

三重の大環虚空をわたる (土星の衛星中ヤペタスの軌道は
土星のと異なる平面上にあり)

秋山中將を弔ふ

刻々に風雲移り極東の

危機迫り来る今日にして
秋山真之中將逝きぬ

歐洲の大戦亂の第五年

春立ちし日に君逝きぬ
維文維武稀世の光。

幾たびか東亞機運のうつろひぞ
『舷々摩する』海戦を
君の靈筆世に告げてより。

想ひやる『空は晴るれど波高き』
對馬の沖のわかつきに
筆を投じて立ちけん君を。

〔敵艦見ゆ〕との報に接し聯合艦隊は直ちに
出動撃滅せんとす本日天氣晴朗なれども波高し

日本海大海戦を公けに
報げし筆の香千歳の
末に名残のにははざらめや。

對馬沖なごりの波の高きまに

血潮の脈も高鳴りて

大文章は湧きいでつらむ。

三笠艦活けるが如き鋼鐵の

中に文藻練れる時

天風海濤靈を添へけむ。

蘭の秀菊^{しうきく}のかをりか其庭の

訓のほどぞ忍ばるゝ

陸と海とに珠ひからしむ

(中將の兄に陸軍大將秋山好古氏あり)

生けるまに一目かはさず忽ちに

將軍逝くと聞く夕

廣瀬の岸の星春寒し。

桐ヶ谷に煙たなびき青山に

土の香寒し四大いま

散りて英魂天に歸るか。

阿修羅軍ふたゝび敗れ天上の
凱歌新たに成るべくば
將軍の靈まづ命受けん。

また想ふ雲錦裳の粧ほひに
君や天上筆とりて
世界平和の頌綴らんか。

(大正七年二月)

*
*
*
*
*

川

川は一切の哀樂を率ゐ
梢の花をのもせの草を
紅の香をみどりの聲を
載せてあなた的大海に
ひろき涯なきおほうみに
あした朝日の莊嚴をやどし
ゆうべ夕日の沈痛をうつす
その大海をめざしてぞ行く。

行きてまた行き流れて流る、
 死よその影いづくに潜む。
 生よその聲いづくにか湧く。
 夕しづかに風吹きて
 さゝなみにほふほとりより
 揚げば空に咲きにほふ
 花か星か天の萬軍かれも又
 無窮に出で、無窮に歸る。

黄河の水もかゝりしか、
 『美なるかな水、洋々たりや
 丘きうのわたらざるは命いのちなり』と。
 春秋遠し二千年
 賢者の非命を岸へだて。
 きゝし至聖の見たる流も。

羅馬「萬神堂」にラファエロ
 の墓を訪ひて

白衣の僧侶群がりて
 夕べ祈の歌高く
 香煙しきりに立ち昇る
 其一院の穹窿の
 *うつろローマの天を見る
 めぐりの圓柱三十六
 むかし十二の神の像
 並びしあとは残れども
 今オリムピア雲暗し。

*此堂の天井はうつろ也

その神々のよみがへり
 微妙のにはひあけぼのの
 紫夕の紅の
 精や溶け来てその筆に
 しみしや萬古とこしへの
 春を活かしし大畫聖。

運命の寵かはた忌か
 青春の夢三十六
 楊柳の姿、春風の面

朽ちぬ香骨世にとめて
ふさはしここに『萬神の
堂』にラファエロ埋りぬ。

天才讚頌

ベツレヘム、ユダヤの村にたぐへんか
ちさきウルビノなんぢより
萬古の畫聖ラファエロうまる。

シスチナのカペラに巨靈天と地と

冥府^みより寄せて君が手に
宿れり聖のミケランジェロウ。

聖に釋迦基督を見る、人界に
萬能のオレオナルド
ダ、キンチイの摩訶不思議見る。

七彩の虹霓溶けて南歐の
春に降れるを掬びしや
絢爛の權化、老チチアノウ。

天上のあまりはげしき光明に

馴れて眩じてラムブラム

偉大の刷毛は暗を帯びしや。

柔軟の膚はだへよ春よ歡樂よ

詩よ空想よ艶麗の

つきせぬ泉ルーベンスあり。

その盛り夢と消え行く帝國の

最後の光全歐に

とゞめて匂ふムリサヨのたくみ。

歐羅巴、誇りは何か藝術の

花と科學の光明と

ほまれは聖に優るとするや。

大亞細亞自ら祝へ、人間と

呼ぶにあまりに聖なりし

釋迦と基督こゝより生る。

小島教授を弔ふ

向陵の學の庭に白筋の
秀才すまいた幾千はぐゝめる、
隠れし君子、小島憲之のりゆき。

向陵の一つの窓に瀑の如く
流るゝ汗を拭ひつゝ、
共に受験の答調べヒ。

折あらば訪はむといひしかね言を
いかに果さむ飛驒の旅
一夜西風星吹き落す。

精悍せいこんの姿若きを凌ぎつゝ、
眉打ちあげて語らひし、
今はた露に泡に比たふや。(一九一八、九月)

ルウソウの墓

萬神堂を意味するパンテオン大伽藍の地下室にルウソウ

の墓あり高く松火をかざす巨腕棺中より出づるもの之を
墓上の紀念裝飾となす。

棺より抜け出る巨大のかひな

光燄虚空に沖れとばかり
巨大の松火高らにかざす。

嗚呼ヂヤンヂヤツク、ルウンウの

使命まさしく大火燄

千歳長く全歐を

おほひし徴とあくたとを

焚きて再び純眞の

自然の姿見むところ。

セイヌの水を震はしし

自由平等友愛の

おほいなる聲その端を

こゝに開けば驚きて

世の「權勢」と「陋習」と

「虚偽」と「偽善」と「奸佞」と

力合はして天の聲

暗に葬り塵に蹴り

跡を絶たむと勉めしか。

狂へる火焔——革命の
 あらび一時——時どり
 偉大の思想四海に布きて
 天才ルウソウ不朽のほまれ。
 塵骸ひきずる苦惱の一生
 終れば遂には時世の力
 ころばんテオン神聖の
 場にとこしへ先覺の
 かたみ留めて世に傳ふ。
 セイヌ南に橋わたる

カイテルラタン青春の
 血の湧く區劃あとにして
 サンゼネビイブ丘上の
 空に聳ゆる聖の宮、
 『感謝の祖國おほいなる
 諸靈に捧ぐ』大伽藍、
 ふさはし中にルウソウの
 終のやすみの床は有り。
 おほいなるもの美なるもの
 まことなるもの集りて

靈火こゝより霹靂を
飛ばし四海に耀かむ。
精華ラテンの文明の
流風千古吹きやまず。

ちさき聲

聲あり聞かずやちさく遠く
「愛」はうなだれ「情」は伏し
血汐は冷ゆる世の沙漠
すみにかすかに呷くを。

あるはほのかにほそやかに
しぐれ淋しき小夜中に
薫ゆるも思きん金けん猊ぎの
一縷の香にさまよひつ。
時にはゆるくまた遠く
波金色いんじきにほふあな
世々の愁の凝り成せる
暮雲の端にたちろくを。

銀河の西に傾ける
夜九天の花の夢

夢より湧きて降りしや。
 櫻の嶺を汚さじと
 塵を隔つる紫の
 雲の夕のたゞすまひ
 その友縁吹きくるゝ
 霞の中の曲もそれ。
 いづれ無何有の郷の春
 春の姫宮おほけなく
 人の世おぼす憐みの
 歌のなごりかあゝ遠き。

あらしの途の遠ければ
 到り到らぬ鐘の音、
 淡路の瀬戸の吹別に
 西に東に漕ぎいづる
 白帆に呼ばふ岸の聲、
 よしやつばらに聞かずとも
 魂よひれふし寂寞の
 無象の岩戸押し開き
 狭霧むら霧千里の霧

暗濃き霧をつらぬきて
ほのかに匂ふ靈臺の
光認めよ——聲あらむ。

流轉

雲の遠嶺、花の色
崩れて褪めてあともなし。
三春の蝶彩深き
翼は露に朽ち行きぬ。
夕ぐれしはし天上の

粧よそひほのみる虹とともに
淵瀬をもとの姿にて。
水は幾度遷りしや。

自然のあとを玲瓏の
光凝り成す心海に
寫すとうとき世々の文なみ、
その百千の系統の
教も去りぬ、藝術の
春は短し、莊嚴の

浄界照すかゞやきの
智慧の愛はた脆うして。

「惱」の權化、光の身

諸天の天の榮光を

おりし大御子ゴルコタの

野末夕べの枯れ蓬あもぎ。

恒河のいさを盡くせざる

流轉るてん無窮の劫のあと

憐みおぼすまなじりは

宿す大悲の秋の露。

崩れし高き世々の夢

浄化の時は遠くして

聖せいのかしらは荆棘の

冠のあけに染みぬとも――

見るべからずや崩れたる

宮に、碎ける世の夢に

はたまぼろしに人の子の

無窮の靈の尊とさを。

南米に行く人に

行程一萬三千里
 人は南の十字の星の
 萬古の姿聖なるもとに、
 茫々の大野地平線を限り
 時ならぬ滿地の雪と
 群羊のうづまくところ
 はたアマゾンの大水の
 岸に珈琲の森しげる郷。

行け行け大地は脚下に廣し、
 太平洋の波捲くあなた
 東海照す日いづるあなた
 自由の大氣を自由に吸ひて
 新たな日本を新たにたてよ。

ロイマアにゲイテの
 あとを訪ひて

薰風通ふ春五月
 カスタニイの葉しげり行き

桃と梨とのみだれ咲き
 中にかすかに鳥うたふ。
 おほいなる靈すみし場
 オリムピヤの電火
 パーテノンの春風
 光は語り暗は歌ひ
 樂はおどり虹は舞ひ
 萬象ひとしく詩に入りて
 全歐の思潮こゝより湧きぬ。
 關山千里踏み破る

霸王の跡は夢なれど
 情海永くおほいなる
 波を湧かしし跡消えず、
 思想の流浩蕩の
 潮の溢れ行くところ
 境へだつる邦も無し、
 此生神の恩寵と
 感謝捧げて八十の
 圓滿善美光榮の
 生の終に天上に

靈^{れい}たちさりし跡こゝか、
 『更に光』といやはての
 聲は何等の標象か
 無窮を翔けて星辰の
 ひらめく處萬軍の
 中に今なほ雲錦の
 裳を垂るゝ影あらむ。

同

詩人の宿のあと訪へば

花^{ひと}一^{むれ}叢のたそがれや
 イルムの流しづかにて
 雲こそねむれ春の岡。

『やさしき河よ流れ行け
 心ものうしたのしみも
 はた口^{くち}づけも過ぎさりぬ
 まことも斯く』と歌ひけむ。

しらべを歌に合せつゝ
 谷間に添うて行く水の

流に耳を傾けし
君のあところ忍ばるれ。

霞もかほる岸のへに
流にとめし面かげよ
あすのいづくの思出か
イルムの水よあゝさらば。

岳陽樓

○焼けしとの音づれ真か洞庭の

太湖にのぞむ風流の
權化と高き岳陽樓は

○生れ落ちて四十幾年縁薄く

夢寐に思ひし洞庭の

名勝一つ今消え去るや

○君山の嶺をあなたに洞庭の

太湖は四萬八千頃

心眼今も高樓を見る

○想ひ見るその洞庭のあさぼらけ

夕の光長江を

呑み遠山を合む姿を

○『慶曆の四年』しかく、幼くて

范文正の文により

先づ名を記せし岳陽樓よ

○杜少陵孟浩然の五律より

特に其名をひかかせて

千古かほりし岳陽樓よ

○岳陽樓焼け落つるとも少陵の

『乾坤日夜浮ぶ』てふ

名詩をうみし不朽のほまれ

○雲夢うんぼうの澤今いかに、吳楚の郷

しづめ百代百靈を

集まらしめし跡亡べりや

○巴峽下り洞庭のおもに舟うけて

岳陽樓を見あげしや

放翁去りて水長し遠し

○四百州擾亂絶えず此國の

運命測るひま無きに

岳陽樓は焼けうせつるや

○同文のよしみ二邦のすぐれたる

友太平のあかつきに

つどふべかりし岳陽樓に

○洞庭に比へていかに東海の

誇り名に負ふ千松島

高樓百尺誰か築かむ

○八百の青螺を前に渺々の

太平洋を傍に

大高森の嶺立つを見よ

○松島の大高森の頂に

新たに築き焼けうせし

岳陽樓を凌がしめずや

○誰か何時その高樓の頂に

争永く跡絶たむ

四海平和の頌歌ふべき

(一九一八、春)

山頂の悲劇

大正七年十月廿三日仙臺第二中學校四五年生百五十餘名
長途行軍の際宮城山形兩縣の境なる熊野嶽に於て大風雪
に逢ひ教諭山中筒井の兩君生徒五島、高平、高橋、安積、池田、小
岩井、武原の七名途を失ひて飢寒にたふる。

青春せいしゆんの花の蕾の百五十
 秋深うして熊野嶽
 六千尺の高さにのぼる。

一點の黒雲湧くと嶺上に
 見るほどもなく銀箭の
 注くがごとく雨おそひ來ぬ。

やがて雨やがて大雪やがて風
 霧またこめて晦冥の

天地の間苦悶の叫。

おとに聞くグレイト、セント、ベルナード
 其風雪のおもかげを
 忍びて若き子等はよぢしか。

落葉らくえふの風に散ること隊みだれ
 咫尺をわかぬ風雪の
 狂ひの中に皆ちりぐに。

導の影を失ひ弱り行く
聲をしぼりて叫びしか
力盡きつゝ遂に伏せしか。

幾度か吹雪の中に見入りしや
その絶望の弱りし目
生の本能まだ絶えざれば。

「まて」の聲耐へよの聲師の口を
幾度洩れし救ひ手の

隊の姿をまぼろしに見て。

救ひ手の聲と聞きしか吹く風を
姿と見しか荒れ狂ふ
吹雪にまじる霧のうづきを。

『一刻は千秋』の語を身にしめて
幾度待てる運命の
いまはのきわみ目を閉ぢし迄、

熊野嶽吹雪亂る、石室の
中にみたりの教子と
二人の師とは抱き合ひて逝く。

教子を思ふ心の温き

それはた寒さ凌ぎ得ず
尊き性よ神見るところ。

飢勞れ凍え疲れて『馬の脊』を
たどり吹雪のたゞ中に

伏せるは若き四つのしかばね。

あゝ無慘うら若き子ら師と共に
吹雪うつまく深山の
大暗黒の中に凍れる。

大吹雪うづまき亂れ荒れ狂ひ
陰鬼陰靈冥府より
襲ふが如き中に逝きしか。

天上の星のまたゝき雪晴れて
凍れるかばね伏しならぶ
上に一夜の涙垂れけむ。

吹雪晴れ寒く夕の光照る

熊野の嶽の山路を
負はれてくだる屍九つ。

ゆくゆくも振り返り見る熊野嶽
満山の雪夕陽に

照る大墳墓無限の恨み。

黙然と聲無き天地死の幕に

包まる如き高山の
夕の路を泣きつゝ下る。

荒蕪に包まれ雪にまみれたる

屍九つ山寺の
夕の床に酷く竝びぬ。

板に似て凍れる衣、蠟に似て
白きしかばね、煤けたる
小さき燈火かすかに照す。

熊野嶽おりて高湯の村里の

夕淋しき唯ゆゑ法ほふ寺

しばし宿しぬ非命のむくろ。

はしき子の屍の雪を打ち拂ふ

親の嘆きに忍びずと

夕日は古寺こじのあなたにいりぬ。

義に勇み危き忘れを、しくも

吹雪の中を返せしか

あゝ紅顔の此の子また逝く(五島生)

恙なくと呼びし別れの一聲を

いまはの際に忍びしか

あゝ逝ける親あゝ逝ける子ら。

大悲劇そのまがつみに顧みて
世の幾萬のわかき子ら
救はれぬべし尊たかきいけにへ

山形と宮城とわくる熊野嶽

六千尺を今よりは
牲の教と人眺めんか。

教子と共に斃れしふたりの師
橄欖山の夕暗に

祈りし君の道踏める人。

教子を今はの際にかき抱く

愛の標象、十字架の
教あらたの光添へたる。

おほいなる自然のあらび運命の
わざ——其前に人間の
力かすけしたゝ伏してやむ。

生か死か神祕の深き大海の
底に誰かは潜り得し
人よひれふしたゞ靈に祈れ。

スウルヤ (太陽)

佛國詩人ルコント、ド、リイルガ古エーダ讚頌の一、太陽の歌
に擬してよめるもの

おほわだつみの岸に位し給ふ主よ、
大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。

尊き御顔の上御せなの上ゆるやかに
いにしよりの潮こそ流るれ。
汀に散り布く巖の中に
雲のたゞ中に燃ゆる御ぐしは
黒く房なし、海の叫と
はてなき風とは傍に狂ふ。
スールヤよ、解き得ぬ影の囚よ、
沙の堆きたゞ中にいね給ふ君よ、
君が御胸には恐るべき息やどる、
息は山々の雪を惱まし、

悲しき暗にうめきつゝ厚雲に
おほはれ消ゆる星を去らしめ、
森の莊嚴の胸に通へる
聲を吐息をむらがりたゝす。

大わだつみの岸の上に位し給ふ主よ
大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ

耀く足に美はしの手に「曙」は
見よ白蓮を帯として來り、

(海のほとりに夢みつゝ君は眠るに)
青き車に薔薇色の牛の四頭を附けぬ。
見よ聖なる棕櫚、銀色の楓、
水のへ浮べる清らの睡蓮、
はた香しき雲におほはれ
踊り踊りてせわしなく
仙女アプサラ廻る谷間は
露と焔に浸されて覺む。
七重のおほ空をかけいづべく
いざ七つの鳶色の馬を黄金の轅につけよ、

海吹く風に倦みし疲をふり拂へ
 大空とゞろにいざいざ立て。
 大わだつみの岸のへに位し給ふ主よ
 大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。
 大空に舞ふ大鳥にまさりて
 おゝ戦ふ者よ、君は勝利の跳に上る。
 物の源なる王よ、君は水の如くに流る。
 君の莊嚴の御姿に充つる有象のみなくは
 君の力、君の威容によりて脈うつ。

耀く空を走りつゝ、永遠の夜にいたるべき
 君の途こそいみじかりけれ。
 蒼空のあなたに其御車の没らんとき
 莊嚴の地平線はいたくも波たつ。
 おゝスウルヤよ光る御影は燦爛の
 衣纏ひて暗黒の水に傾き
 淵は君を迎へて君の前に開く。
 いざ深き岸に下りつゝ、睡りませおゝ大君。
 大わだつみの岸のへに位し給ふ主よ、

大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。

永遠の時を無窮の空を

貫きはしる耀ける戦士よ

健かなる大地の胸に

豊饒の大水注ぎつゝ

燃ゆる嶺のへ南におはす

大千世界の王なる君よ、祈をうけて守りませ

おほわたつみの岸のへに君を歌へる

平和の民を清浄の子らを。

太陽の讃

日の本と誰が呼びそめし——
新あらたなる

日の本の歌あらたなる

大圓輪の讃歌ふべく。

東海の扶桑の郷をまづ照す

大日輪の光明を

讃と稱へんあらたの歌に。

野も山もみどりは萌えぬ冬王の
酷威を掃ふ赫々の
大日輪の恵のかけに。

西の空春の山の上煌耀の
圓輪沈むしづけさや
誰れか火焰の海狂ふ見む。

鐵も石も熔くるばかりの烈々の
夏のまさかり太陽の

散ずる熱の二十億の一 (天文學者の計算に因る)

太陽の胎を離れし遊星の
ひとつ地球の中にして
生けるもの皆太陽の子ら。

緑の野緑の草のおざやかに
大地貫く生を見よ
偉なり太陽その生あたふ

パンヤンの大樹ひとつの根よりして
全森林を造るもの
聲もしあらば太陽をほめむ。

絢爛の熱帯の花、清艶の
アルペンの野花らせい一齊せいに
無言の歌に太陽を讃ず。

暗黒の地底千尺坑道を
穿ち掘りとる石炭の

黒きもむかし太陽のわざ。

かへりみる五尺のむくろ漲りて
流るゝ血潮、震ふ肉
いづれか太陽の力ならざる。

太陽を蔽ほひ天地を暗として
妖魔の如く黒雲の
はびこるかゝる其本知るや。

印度洋入る日をひたす大波の

本さぐり見よ、一滴も

太陽よりし生れぬぞ無き。

華清宮凝脂を洗ふ温泉の

玉と滾々湧きいづる

その本高く太陽に見よ。

生けるもの生きんがために食を取る

その取るものも取らるゝも

いづれか太陽の化身ならざる。

其光其熱かくて續く年

一千万を過ぎじとや

科學の權威太陽に宣ず。

人間の境より見て無限なる

一千万よ大椿の

齡も蜉蝣、宇宙のすみに。

富岳登攀

見おるせば雲の大海、見あぐれば
雲の大空、風寒き

夏八月の富士の頂。

石室いわむろをゆりて虚空に哮ゆる風

肌つんざきて冬王の

威を八月の峯に示せる。

見わたせば寶永山の頂に

虹ぞかゝれる、しばしのみ

富士の高ねに雲はるゝ時。

夜半の空に聞くは天鷲、すゝろにも

わがファンタジイ青鸞と

黄鶴嶺に舞ふと夢みる。

石室の夜半の夢さめ、恍として

下界に吹かぬ咆哮の

○ 富士のたかねのあらしを聞きぬ。

頂を降りて一夜を石室に

すごし古人の句を思ふ

○ 『燈人は座す白雲の中』

たそがれの暗迫り來て千仞の

黒き峯筋矢の如く

○ 目路貫きて末雲に入る。

雲の海、雲の大波へだつれど

何かはあらむ脚の下

○ 十三州のあけぼのを見る。

○ 五合目の峯つたひ行くうしろより

強力よびぬ『三ヶ月の

湖水あらはる雲の下に』と。

○ 蓬々と袖を掠めて魔の如く

靈の如くに雲すぐる

○ 劔が嶺のへひたにめざして

黒き砂赤き小石のかさなりを

ゴソと踏み行き攀ぢのぼる

○ 幾百年の前の噴火ぞ。

○ 喬木につゞき灌木影收め

砂に這ふ草また絶えて

○ 赭山赤裸に目の前に立つ。

股根より片脚かけしアメリカの

若き旅人杖により

○ 富士の頂極むるに逢ふ。

○ 石室の狭きにやどる幾百の

むれぞ原始の生にして

○ 面洗ふべき水だにも得ず。

蚊のなきをせめていみじと稱へつゝ

幾百のむれ頭ふれ

背をすりあひて石室に寐ぬ

○ のぼり來る行者の鈴に夢さめて

石室の戸よりすかしみる

星影寒し朝近からむ。

喘ぎく黄ばめる面をうなだれつ

よわれる妻の手を引きて

○ 險しき阪を攀ぢくるもあり。

先達に取り残されて岩かどに

投ぐるが如く身をもたせ

吐息に嶺を眺むるもあり。

○ 自働車に裾野をかけり鞍の上に

八合のぼり四五丁を

よぢて登山と誇れるもあり

○ 十三と十二と十の子ら三人

俱して富岳の頂を

妻もろともに今日攀ぢ登る。

命あらばまたたち返り幾度も

君もろともに訪づれむ

富士の神山いやに尊き。

(大正七年八月)

わが短歌

わが手觸れわが眼眺めわが心

感ずるすべて玄妙の

神祕に充たぬもの無きを思ふ。

存在の意義や何もの一切は

いづれか謎にあらざらん

智慧やそもく何を悟りし。

百年の命短し、人の子の

識に映ずる幾何ぞ

浩々の大海その一しづく。

たゞ心——一より推して十を知り

百千萬億阿僧祇の
世も想像の目にぞ眺むる。

形なき

○ 神祕の瑣時くさりときを超え

方所ほうしよを越えてかゝらずや
無線の電波何の暗示ぞ。

○ 靈と靈太平洋の波を越え

ウラルアルタイ横切りて

語るか科學まだ測り得ず。

○ 天高く地厚く前うしろと後うしろとに

時ときの無窮に延ぶる中
○ 蜉蝣かこうの生せいも意義なしとせじ。

秒の針秒の針うごくたびごと人の世に

○ 五十の墳墓うぶき築かれて
五十の産衣うぶき新たに縫はる。

茫々のはてなき虚空一點の

アークチユウラス近寄らば

大日輪を百あはす光。

○

印度洋潮の巨靈左右の手に

太平太西二洋とりて

一萬里程坤球めぐる。

○

炎々の火球このかた萬劫の

進化を経つゝ人間を

うみて地球は自覺に入りぬ。

○

火は水に、自由の意思は必然の

理法に、矛盾集りて

一大調和、宇宙は成りぬ。

○

天翔くる天馬の行くゑ百千の

凡馬の追ふを許さるる――

○ 詩人の筆もかゝれとぞ思ふ。

嘶いばひなす金鈴きんねいの音雲裂いきて

下界げがいに雷かみと轟とどろくや

詩人しじんの歌うたもかゝらましかば。

○ これ無なくて禽獸けいじゆう——ありて人間にんげんか

生せいのみなもと生せい々の

天地てんちの靈たまにひれふす心。

○ 「敬けい」ところ、神秘しんぴの海うみの一滴いつてきを

かすかに覘のぞく人ひとの子こが

○ 「無限むげん」の前まへにとるべき姿。

○ 玄げんの玄げん、神かみのまた神かみ。一切いっけつの

存在そんざいの意いを思おもふ時とき

○ 魂たまはそゝろにたゞひざまづ跪ひざまづく。

○ 想おもひやるはてこそ無なけれ人間にんげんの

「知ち」の進すすむとき一層いっしやうの

○ 「不知しらず」は必ず伴ともひて湧わく。

理か法か、たゞ人界に人間の

心によりてありと見る、
限らるゝもの名を人といふ。

人間の知をあげつらふ「知識論」

あげつらふもの人なれば
身の影を逐ふたぐひなるべき。

いかばかり薄くも裏と表との

けぢめを見ざる紙あらじ

○ 至聖も遂に比較的のみ。

○ 大宇宙、その大海の一しづく

しづくに宿る十億の
人間情の海また湛ふ。

○ 大地球やがては夢と消ゆべしと

シエクスピヤの歌ひけむ
○ 東洋思想のたゞいるはのみ。

飛行機の翼にこの身のせ行かむ

四千萬年秋ふけて

まちかき星の世に入りぬべき。

とある夜半星は語らむ崑崙と

富士とヒマラヤ一齊に

頂高く靈火のぼると。

巨大なる何等の拳^{こぶし}大空に

投げしつぶてぞバラボラを

ゑがき彗星無窮に走る。

美は美なり摩訶不思議なり何人か

式と律とに括るべき

西施のひそみ太眞のゑみ。

我のみを衡^{はかり}となして物みなを

さばくべきかは人ならぬ

魚は水には溺れざりけり。

客観の眞とはなぞや、いづくにか
主観によらぬそれを見む
鐵黒しとは人の目にのみ。

○ 獨創の誇りは何か耳と目と

脳と手足の働きと

いづれかよその果みにあらざらむ。

○ 獨創のほまれは何か無意識の
摹擬か世を蓋ふ大綱の

目のたゞ一つわが生にして。

○ 識のよそ時間空間識のうち

まぼろし共におほいなる

夢なり神秘三千世界。

南歐雜詠

ボゾリの夏の岸うちて
銀山崩るゝ怒濤の叫び

叫を後に逍遙の
わが影『シビルの洞』近く。

斷崖高くそばだちて
大洋の水盡くるきわみ
白楊楊柳憂を吐いて
恨を凝す波にのぞみ
下には直ちに白日消えて
冥府の流ものすごく
フレガートンの焰の波

まじるアヒーロンの焰の水
彼には暗流陰府の底より
さながら遅々たる幽鬼の群
歩むに似たるコチタスの水
一つに共によるところ
暗黒の巖さかだちて
永遠のうめきひく處
此南歐の岸のうへ
詩聖の夢のたどりしよ。

水は曉の露湛ふ
 今一面の清湖の岸
 岸は葡萄の園しげき
 緑に深き夏の色。

『未來』の暗き洞窟を
 通じて炬光を望むごとく
 人間の命を占ひし
 シビルの靈は遠く去りて
 詩聖の夢は三千のむかし、

それよりいくたび桑滄の變、
 七丘榮華の極みのなごり
 かなたクエーマエの岸のうへ
 玉樓金殿ならびたちし
 歡樂の郷不夜の郷、
 五百の山羊を驅り來り
 乳にましろき膚浴みし
 妖婦笑の聲はいづこぞ。

○(右ボゾリ灣上、アバルノ湖邊、ホーマアの「ガデツセイ」第
 十卷によめるところ、こゝより直ちに冥府に通ずと信ぜし也)

誰の思のかけとめて
夕の空に暮れのこる
雲のにはひのくれなるは
月にも惜しき面かげや。

焰を收め火をつゝむ
嶺は夕ぞ静なる
霞の袖にかきくれて
のこる烟の一筋や。

夢より淡くたなびきて
迷ふさながら人の世の
悩み了りて天がける
魂の姿と見るばかり。

風海草の香を吹いて
星は洩れいづ雲の端
『オリワ』の森のしげみより
ひゞくは牧の鈴のねか。

沿ふは汀の波のおと
音は島々彩どれる
潮の上の高御座
靈のみまたく聞しめす。

智慧なく目なく光なく
幻を逐ひ影を戀ふ
塵の身いかに天地の
此夕ぐれを稱ふべき。

さはれ泡沫ましるなる
しばしの夢も海の影
さらば色なき調べなき
わが歌なほも一節か――

雨を、あらしを、夜あらしを、
碎けし舟にたすけ呼ぶ
聲を、うめきを、整へて
調ふる靈の高き御歌の。

(右カプリの島にてエスキアスの火山を望みつゝ)

羅馬のカピトルの階下にリエンヂを懷ふ

末世まっせひとたび身を起し
 あらしに叫び雲に呼び
 電光のつばさ借り來り
 自由の旗を飛ばしめし
 羅馬千載光榮の
 最後のかたみ嗚呼リエンヂ、
 花悉く碎け散る
 春の恨みの紅くれないか、

館は破られ身は裂かれ
 鮮血こゝにカピトルの
 石獅のもとに灑そぎしよ。
 あゝ七丘の夢はるか
 雄圖曆數残るやいづこ、
 新緑染むる舊山河
 暮雲思の色深き
 ゆふぐれ淋しあゝ羅馬。

ユリゼアム

羅馬帝政時代の初期フラビヤ王朝に建てられし帝領中最大の闘武場、八萬餘の看客席を有せしといふ、中世時代には此人造の石山より切り出せし材料を以て巨館宮殿屢々築かれぬ、今尚ほ儼然として羅馬市の一隅に聳ゆ。初めてコリゼアムを訪はんものは薄暮或は月夜をよしとす

弦月沈める破窓のあなた
 光芒するどき巨星の姿
 天の驚嘆の目に似たり、
 人造の山、コリゼアム
 さながら地底に湧きいで、

高く夜半の空に入る
 穹窿窓戸圓柱の
 頽壁こゝに二千年、
 むかし人種の罪業の
 呼びしと傳ふ洪水の
 禍またも廻り來て
 大陸海となるべくは
 鯨鯢沖より迷ひ出で
 この石壁のただ中に
 鰭を收めて休まむか。

もしくは人間の世の終
 劫灰深く地に布きて
 白骨かすかに枯れのこり
 月光すでに暗うして
 大日輪の光明も
 暗紅凄く燃ゆるとき
 他界の靈のさまよひの
 途わが地球横ざらば
 休むはこゝかコリゼアム。

忽ち襲ふ夜半の驟雨
 破れし壁に身を寄せて
 待つ間ほどなくはるゝ時
 雲より洩るる星震ひ
 無月の暗の凄しき
 巨壁さながら睨むに似たり。
 驕奢腐爛の世の犠牲
 グラデイトルの幾千の
 血汐の波のみなぎりし
 嗚呼これ凱旋三百餘

緑波うづまく地中海
 その天領の池となり
 ライン、ダニユブ、ユーフレツ
 其帝國の堀となり
 曙光東に現はれて
 まづタイバアの源照し
 夕陽西に傾きて
 なほ七丘の領に入る
 羅馬——世界の權力の
 するしと立てるコリゼアム。

更に破滅の比たぐひなき
 その荒廢の大墳墓
 おほいなるもの時くれば
 みな幽冥の暗に入る
 その標象とそびゆるや。
 雲は慘憺の夜の色
 陰風しきりに膚吹きて
 戦慄そゝるに堪へがたき——
 あゝ暗黒の幻影と
 見るコリゼアム、聯想の

群にたぢろく人の子に
あまりに凄し、千歳の
威靈たゝへて聳立てり。

萬國青年大會に集る信徒の讚頌

歌はざらめや
朝汐は喜の叫を擧げぬ、
唱へざらめや
昇る日は喜の光注ぎぬ、
讚せざらめや

たましひは喜の歌に溢れぬ、
崇めざらめや、
萬象は喜の色皆染めぬ、
歌はざらめや、歌はざらめや、
聲大水のひびきなしてあゝ歌はざらめや。

ベスレヘム星のかゝやき、
聖靈の肉のあらはれ、
新なる救の光八紘に照りしこのかた、
一千九百七の春秋。

大東の潮をわけて
つどひ來し萬邦の使徒
いざ聖なる神を崇めむ。

言葉は萬よろづ

心は一ひとつ

百千の流の合調

注ぎ入る靈の大海

「主の祈いざ共に祈らむ。」

いにしへは
橄欖の岡のこみどり
ヨルダンの鏡なす水
染めなし、主の御榮
あらはせし主の御惠、
見よこゝに今
玲瓏の富士の白雪
はた藍涵す東海の波、
アルファなりオメガなる
全能の神の御姿

光榮の影をほのみす。

歌はざらめや
唱へざらめや
讚せざらめや
崇めざらめや
萬の言葉萬の聲
大空の廣きにわたり
大水の響をなして
あゝ全能の神を主しよを
聖なる靈を歌はざらめや。

セラリオ(トルコの後宮)

歐亞みなぎる陰雲の
影はセラリオ蔽はじか。
波斯印度の錦繡と
羅綾とまじる帳の下
寵妃の膝なるリラの絃上
芭蕉の大葉にそよぐ露の
しづく微風に吹かれ散れば
ものうや金髪肩に亂れて

拂へどかゝる月の輕雲。

その對照か漆なす

黒髪長き東方の

おとめ斜めに牀により

皓腕あふにもたせつゝ聴く。

唇厚く眞紅を染むる

黒き奴隷はかたへに立ち

珠玉點ずる白金の

三尺長き管の端

(アラビヤ産の名木は

吸口刻み)香料を

混じて夢をかもすべき

エジプト煙草ひとつまみ

つめしを捧げかしくみぬ。

ガブリエレ、ダヌンチオ

アドリアの海アルペンの嶺越して

飛行の翼敵國の

都の空にあらしを捲きぬ。

「死の勝利」海洋の讚爛熟の
筆のすさびも一時か、
中佐ガブリレ劔取りて立つ。

虚空より爆弾ならで投げくだす
檄は百萬猛烈の
火にも鐵にも優らざらめや

ベルリンの猛虎に強ひて曳かれ行く
キインの瘦せし山犬に

投ぜし檄の言葉聞かばや。

イレデンタ、イタリヤやがて七丘の
都の領と回る時
『カントウ、ノーボ』篇を續けむ。

永遠の都、七つの丘の上、
ラテンの光新なる
「ローマ」の意義を君歌はむか。
（*彼の著作。「ローマ」は「勇」を意味す）

（一九一八、十月 東方時論）

時は到りぬ

花薫る巴里の城下の盟をと
夢みし魔王今いかに
リンデンの町秋かぜ寒し。(九、五)

猛獸の狂ひは何か、時いたり、
ルトデンドルフ尾を捲きて
逃ぐる、いざ追へ聯合の軍。

神人の共に怒れるゲルマンの
兵追ひ破れラテンの子、
疾風枯葉を捲くが如くに。

澎湃の潮あらたに回り來ぬ、
雄武ラテンの腕見よと
立ちてチュートン皆打ち攘へ。

秋かぜに大波小波戦勝の
誇ひとしく今叫べ、

ソナム、オアーズ、エース、マルヌよ。

ライプチヒ、ヲータアローに百年の
むかし潰えし驕兵を
今チュートンの軍になぞらふ。

時到り天定りて人に勝つ

ことはり見よとゲルマンの
先に傲りし子らに宣ぜむ。

ベルジウム、北フランスの戦場を

昨日の夢とあとに見て、
『獨逸のライン』踏みこすはいつ。

時ぞ今、戦馬いさみて秋風に

嘶高し、目の前に

ラインのうねる近かるべきを。

長江の天險ライン人工の

巧つくして防ぐとも

聯合の雄師あに越さざらむ。

耳たてよ、バンデモニアム、ベルリンの
空に悲鳴の聲ひびく、
一簣缺かむや九仞の功。

ウンベール、マンジャンの軍雙の翼
おらしに鳴りて逃げ脚の
チユートンの兵追ひつゝ進む

おだやかのおもて元帥百萬の
軍を胸裏に蓄へて
心兵驅くるいづれの郷ぞ。

エトアール凱旋門の傍に
やがて刻まむ碑のおもて
『元帥フォーション國救へり』と。

河と流る血の紅の洗禮に
邦よみがへり赫耀と
ラテン文化の光照るべき。

(一九一八、十月 東方時論)

遠つ世に

(竹風君の愛嬢の結婚を祝して)

(一)遠つ世に天の御柱行き廻り

神の契りし道にして
之子歸ぎぬ祝はざらめや。

(二)青き鸞紫の鳳人の世の

春に舞へかし額白く
頬くれなるの人ことほぎて。

(三)三千の珠玉の履と黄金の

十二の釵何ならむ
陽臺の春生ける花咲く。

(四)巾幗の織手國賣るレーニンを

斃すと聞ける時にして
歌ふ周南第一の章。

(五)新なる妹春を祝ふ大正の

七年九月敵國の

驕兵西に日に日に敗る。

(六) 叢雲むらくもの憂うれわとなくさしのぼる

玲瓏れいろうの月一輪いつりんの

隈くまなき光妹みつね脊せの聞きこに。

(七) 鴛鴦うんおうの契くわいを初はつめ琴瑟しんせきの

調てう整せいふ此月このつきの

桂けいの光みつてりまさるべき。

(八) ひんがしの旭日あさひの邦くにを守まもるべき

はた飾かざるべき子こら生なめと

今日けふ新あらたなる妹あね脊せを祝いわふ。

(九) 武ぶにすぐれ文ふみに秀ひづる家いへの名なを

兼かねて榮さかへよ大倭おほ

日ひに新あらたなる邦くにのいもとせ。

(十) 陸奥むつの信夫のぶの里のさとと嚴いつくしの

島しまの里のさととの喜よろこに

さんさしぐれの郷歌もよし。

(二九一八、九月)

一葉落

一葉落ちて秋知るべくば生きんため
血汐に渴き家を焼く
神戸の騒ぎ君何と見む。

霜ふみて堅氷いたる―生きんため
起りし騒ぎ耳にして

仰げばあらし雲吹きまくる。

黄金を空に積むとも民衆の
嫉み怒りを招くとき
三層の樓一朝の灰。

利に聰く富にかしこき名ありとも
教無き身の悲しさや
巨萬の寶たゞ民の詛ひ。

民衆の心微妙のはたらきを
知り得て後ぞ利を計り
富集めむもよろしかるべき。

富山の市米の高きにいきどほり
女性幾百叫喚の
詛ひに店を襲へりといふ。

黒潮の流さかまき幾萬の
魚介の群をはらふ如

動亂の波世をおほひくる。

『米高し』何等悲惨の運命を
暗に示せる言の葉ぞ
無形の波瀾世にうづまけり。

○ 歐洲の大亂四たび年廻り
陰雲陰霧いや暗う
碧の空をいつか見るべき。

『大局の半も未だ過ぎ去らじ』

冥想の目に運命を
観ぜる人の夢かまことか。

支那にして七國の亂、我にして
元龜、天正さも似たる
世界の狂ひいつしづまらむ。

天上のあなた等しく雲亂れ
あらし狂ひて霹靂と
轟雷競ふ、一世のなぞらへに。

アッリーマン、オルマツウドの戦は
天のあなたに狂へるや
驚異の世紀何を孕める。

大亂とよべる熔爐のたゞ中に
すべての物の投げられて
やかて渣無き黄金を見む。

大波瀾四海をおほひ人類の
またき革命成し遂げて

やがてやむべき戦か否か。

いにしへのノアの洪水、一切を
呑みて新たな世をうめる――
今はた似ずや大亂の波。

(一九一八、九月六合雑誌)

平和の曙光

霜枯の軍の場に自動車の
爆音さびし、白旗を
立て、進めるゼルマンの使者。

白旗をたてくる敵の使者引きて
微笑湛ふる元帥は
手に秋霜の威の文握る。

千萬の霹靂落ちし大平野
今寂としてゼルマンの
使者の一群うなだるる見る。

ロマノフとハブスブルグの滅亡に
ホーヘンツォレン跡追ひて

鼎の脚の三つ皆倒る。

驕慢と無道のあらび報ひ來て

千仞の坂圓石を

投ぐるが如く亡び沈むや。

千萬のむくろを積みて功成らず

無道の報國破れ

家失へる悲鳴の狂ひ。

雷霆の怒の如く全歐に

轟き荒れしチュウトンの

末路あらしに散る葉に似たり。

鐵と血のあらびの權化、全歐を

馬蹄の下ににじるべく

立ちし蠻軍かく亡ぶ見よ。

「おほいなるバビロン斯くぞ亡びむ」と

天使は海に大石を

投げぬ、ゼルマン見よ天の罰。

暴の報い暴に亡ふと警めを
千載遠く残し得て
カイザアの名を朽ちざらしめよ。

領内に敵の一兵入れずして
土崩瓦解の奇蹟見る
天の怒は火よりもはげし。

堅城のストラスブルグはなメツツ
ケルン、マインツ、コブレンツ
併せて共に一朝に棄つ。

龍王の威を鎮むべき百千の
海の堅艦ことごとく
舳艫ならべて敵に奪はる。

「劔戟に亡びむ劔をとる者」と
聖の教の現證の

ひとつ今はたゼルマンに見る。

皇天に代る權威と高ふりて
世を見下せし果を見よ
亡家亡國楚囚の恨み。

赤旗^{あか}をたて、逃る、親王の
自動車追うて水兵の
一團銃を一齊に撃つ。

大空に滔るまでに旗赤く
潮漲る、ゼルマンの
子もマルセイユ歌ふ聞かずや。

賢と愚のへだ、り計る三十の
年のあしたは如何ならむ
世界の潮日に日に高し。

ゼルマンの粕をねふりし閩族の
夢は破れぬ、東海の

空は今より春にはふべく。

來るべき聖誕祭よ世の東
世の西こぞりホザンナの
讃頌天に地にどよむべき。

永遠の春の曙見え初むる
一千九百十八の
歳に今逢ふ祝はざらめや。

(一九一八、十一月)

奸雄の末路

全歐の地圖染め直し、選民の
領を四海に開かむと
呼びし奸雄今何の名ぞ。

冒瀆の言を悔いずや『皇天の
選びわが民——わが上に
降りぬ神のおほいなる靈』

『神の劔、上帝の武器、天命の
攝政——われにそむくもの
信ぜざるもの皆死すべし』と。

サラエボウ邊土の空のさわぎより
風雲の機に乗りいでし
鬼神に似たる霸王のいさみ。

一瞬に馬蹄すゝめてセイヌ河
バリ滿城の春占めむ

大夢の破すでに久しく。

このかたの絶望の勇、兇猛の
あらび歐土を震はしし
業みな頭上薪積むのみ。

王城の夜半に、露營の曉に
神秘の文字いくたびか
ベルシヤザールの兇を示せる。

リンデンの街ちまたに立ちて大空に
ドームの高く入るを見し
最後の時か落葉の秋。

ボスホラス、ダーダネルスの海峡に
弦月の旗まづ沈む
秋凋落を告ぐる一葉いちやう。

ガリポリの無慚の敗、大英の
獅子王の名を恥ぢしめし

昨日を夢の一場として――

ゴールデン、ホルンを過ぎて黒海を
目がけ寄せくる澎湃の
怒潮に進む聯合の艦。

さながらにヨブの凶報、戦場の
西より絶えず傳へ来る
大敗滅の無慚の叫び。

海陸に無比の暴威に惱ませし
民の紅涙一滴も
全能の座に昇らざらめや。

侵入の領土の民を射斃して
小兒の手首切り落し
その目括りし虎狼の非行。

救命の器とりあげ甲板に
老幼婦女を移らして

潜航艇は悪鬼の笑。

波切りて潮けたてて一令の
もとに忽然沈みさり
號哭の民みな溺れしむ。

人間の想像の目も寫し得ぬ
凶悪のわざ悉く
犯せる賊徒いかに罰せむ。

驕慢と虚榮と誇大妄想と
身を蝕みて神明の
怒に遂に元凶敗れ――

リンデンの頭にたてる王城の
あると逃れて倉皇と
アメロンゲンの偶にすくまる。
國際の約たゞ紙の一片と
呼びし元兇その約に

よりて今全く恥を知らずや。
エルダンの堅城の前十萬の
かばねを積みし虎狼の子
運命のきわみ何の涙ぞ。

聯邦の未來の霸王、全獨の
六千萬の民統べむ
位失ふ悲憤の涙。

滔天の悪を極めし應報は
未だ到らず紅涙を
權失へる故に灑げる。

反間を四海に放ち列邦の
好破りて漁父の利を
あさりし報、亡命の賊。

人間の作るあらゆる悪名に
呼ばんも遂に飽きたらじ

千萬の屍かれに築かる。

皇天の正義の秤千萬の
屍を積みし元兇の
滔天の罪いかに量らむ。

夜深けて天の萬軍燦爛と
下界見おろす光の目
魂ひれふして今何を曰ふ。

註

一千九百十四年九月十三日東戦場の獨逸軍隊に下せし勅命

西園寺侯に寄する歌

洛東の田中の郷に閑雲と

野鶴を友の一高士

人生七十夢すでに足る。

権か名か富か雲烟目を過ぐる

一場の夢——大空の

碧の鏡高く澄み行く。

想ひやる波爛の起伏五十年

銀鞍白馬風流の

公子いにしへセイヌの岸に。

一代の俊才若く光明を

花を薫りを藝術を

樂を斯文を讃せざらめや。

嗚呼セイヌ、自由平等友愛の
大義かゝかくパリの郷
其水其空誰れか忘れむ。

月卿と雲客の名を世々にせし
公子あらたの洗禮を
受けて萬里の波のりかへす。

如何にせん東海空猶昏く
春寒うして爛漫の

百花の粧見んよしも無し。

「東洋の自由」の光おほはれて
才を抱きて懊惱の
姿を見しも時世の非運。

幽蘭の薰り空しく溪谷に
閉さるゝ時繁りあふ
荆棘途を塞ぐ幾重ぞ。

南海の兆民はたまた時を得ず
一代の才いたづらに
奇行に隠れ陋巷に逝く。

青春の夢いまいづれ、廟堂に
黄金の印帯ふれども
時に利あらず脾肉の恨。

浩蕩の波に白鷗没しさる
跡を學びて一孤舟

五湖の烟波に嘯くもよし。

春秋の遷りいくたび時流れ
勢替り片鱗の
閃き時に雲より洩る。

後進に途を開きて閑窓に
薫ずるかをり洛東の
秋は深け行く故山の姿。

何事ぞ歐の中原一驕兒
天を恐れず命知らず
日月暗し無謀のいくさ。

ルビコンを渡る英雄いにしへの
跡に比へじ驕慢と
妄想修羅のをたけびを産む。

全歐の關山ゆらぎ千萬の
かばねを積みて海洋の

波湫々の聲また咽ぶ。

おほいなる戦亂五年、ボスホラス
ダーダネルスの海峡に
秋凋落を告ぐる一葉。

程もなく霹靂ゆりし大平野
寂寞としてゼルマンの
使者の一群うなだるゝ見よ。

時到り天定りて人に勝ち
狂へる、虎狼、元兇の
破滅に曙光、紅くれないの色。

百年の經綸斯くて基おく
エルサイユ宮、萬邦の
使ひとしく星と集る。

東海の扶桑の郷の名に於て
星と集る列強の

欽差の中に誰か耀く。

南陽の草廬はむかし、東海の
望を負へる一臥龍
起たしめずして誰を名ざさむ。

目を舉げて四海いづくに英雄の
共に語るを求むべき
セイヌの岸に猶故人あり。

大局の經綸、しらず誰れが手ぞ
かれに大英の大宰相
かれに北米無冠の君主。

たゞざるや、嗚呼西園寺、王臣の
蹇々『逸を求めんや
殘軀をいたせ匪躬の節に。

何事ぞ期待空しく鉄輪の
波切りす、む、海上の

堅城の中君の影見ず。

北米のおほいなる影三千里
大西洋の汐けりて
パリに向ふと飛電のたより。

今更に何にためらふ——風雲の
機は忽として彗星の
一たび去りて歸らざること。

閑眠はすでに足るべし、時は呼び
潮は招く、天洋に
星槎とくく、跡を追へ。

閑窓の秋水の夢さむる時
廟堂の春風の樂ひく時
高士の節に二つあらむや。

思はずやハルビンの秋、風寒く
銃丸とびて、元勳の

血は白霜を染めしいにしへ。

邦國に節をいだして朔北に
身を亡ぼし、壯烈の
跡千秋に垂れて朽ちせず。

前鑑のおほいなる跡今更に
たゞに史上の名とせむや
死生は一途、邦に捧げむ。

皇天の恩寵あつく身にたれて
偉なる使命に盡し得て
高士の懐は涼しかるべき。

五十年維新のあとは偉なりしも
更に偉なるは後に待つ
誰れか風雲の機を捕ふ。

東西ひがしにし一つにまじる潮流の
激するところ、陋習の

古きになじむ邦は亡びむ。

大東の邦の運命吉か否か
千載の決よるところ
高士いかにか起たてやまむや。

鈞天の樂は響かむ、一代の
巨星集るエルサイユ
千里春風花ひらくとき。

起たざるやあゝ西園寺東海の
邦の使命のよるところ
世界思潮は日に湧きかへる。

光榮の佛蘭士

日東の空より遙か雙の手を
舉げてフランス光榮の
極みの勝を得しを讃ぜむ。

傾けよ葡萄の美酒の萬石の

生ける喜生ける詩歌
美なるフランス遂に勝ちたり。

想ひ見るパリ滿城の大歡喜
人は狂ひて舞ひ踊り
勝てりと呼ばむ空どよむ迄。

想ひ見るブルバールの人の波
樂土は此地此時と
凱歌を揚げし其宵の興。

あゝセイヌ、流照して瑞雲の
幾朶其日の空彩ふ。
雙頬の紅、人若やがむ

あゝセイヌ其水北に海峽の
潮に入りて『ゼルマンの
ライン』の水に逢ひて何言ふ。

あゝセイヌ、空は暮雲の愁より
泣きしは昨日、江上の

歡呼の雷に答へどよまむ。

チュウレリイ、シャンゼリゼイの逍遙の
羅綺今晴に驕るべく。
樓臺參差、樂波と湧かむ。

昨日まで五年にわたる暗黒の
愁と恐、寂寞の
すみか、再び樂園の影。

昨日迄長距離砲の霹靂に
畏怖の空氣のみなざりし
バリ今ゆらぐ祝砲の聲。

昨日迄砂囊に壘に百方に
防盡くせし大伽藍
美の宮殿はいや照りまさる。

昨日迄轟雷叫び滅亡を
降らしし大都今にして

また不夜城の輝を見る。

ロシギョール愁に酔ひて春風に
泣きしブウロギ今日にして
霜降る空も花咲くに似む。

ブウロギの園の池のへ鴛鴦の
生ける錦繡いくむれの
姿平和を今ぞ彩へる。

ルールの美の殿堂のおほいなる
扉ふたたび開かれて
色と光と彩と漲る。

鐘樓の上より高く祝福の
叫を愛を讃頌を
セイヌ河上の塔とゝろかせ

マドレーヌ、サンゼネビイブ、シユルピイス
ノートルダムの莊嚴の

鐘一齊にホザンナ歌へ。

エトアル凱旋門の頂に
エルダン、マルヌ、エーヌより
歸る勇武の旗翻せ。

光榮の極みの勝に元帥の
若やぐおもて、フランスの
偉なる蘇生の標象を見よ。

紅の粧よそひ都の千せん萬まんの
鏡中の春久しかれ、
毒の兇獨斃れて起たず。

歐洲の文化の光傳燈の
ほまれフランス、赫燿と
炎朗いよよ空を射よかし。

光榮のグライス偉なるローマより
華美のイタリイ引き續き

傳へ來りしラテンの精華。

五十年むかしセダンに又パリに
白旗立てし國の耻
今こそ雪げラテンの意氣に。

コンコルド其一偶に五十年
黒衣纏ひしアルサスと
ロレーンの像と今よみがへる。

其黒き喪衣そらいを脱ぎて平等と
愛あいと自由の標象の
三色さんしよくの旗今日こそ纏へ。

永かりし無念の標をかきのけて
月桂飾れ花飾れ
鹵獲の砲車ひれふす前に。

滔天の罪を重ねし兇惡の
國を懲せと星の如

人は集るエルサイユ宮。

エルサイユ其玉殿に建業の
式を擧げたる敵の國
その崩壞はこゝよりぞ今。

飽く迄も懲らさざらめや天人の
ひとしく怒る兇暴の
虎狼無慚の元兇のむれ。

檻牢に入りし虎狼の爪牙みな
断たてやまむや全歐の
禍永く根ざししところ。

元兇を飽くまで懲し、公道の

光か、げよ、ひがしにし東西

瀆武を學ぶ邦の戒め。

チュートンの領の要塞ことごとく
赤土と化さば安からむ

誰かラインの岸と限れる。

フランスに課すべく毒の宰相の

四年の前に曰ひし聞け、

應報まさに毒懲す時。

鑑みよ東亞のむかし吳と越の

興亡の跡、おほいなる

禍わざはひ根ねより断たてやまむや。

ヂャンダークいにしへ生みしフランスの
邦、英靈の憑るところ
萬古晴天霹靂飛ばむ。

「恐るべき年」を嘆ぜし大詩人

幽淵の靈めざめなば
其歌いかに此日此年。

(*ユーゴー)

わが歌はかく、さはれ見る關山の
覇國の興りまた滅び、

乾坤永し、一局の棋や。

天上の星の世界に身を移し
想像の目に眺め見る
大局遂に蠻觸の郷。

光榮をやがては神に皆歸せむ、
塹壕のあと白骨の
かたべ夜半の星仰ぐ時。

大能をやがては神に皆歸せむ、
不可知の呼吸一瞬に
天造るべし地崩すべし。

アルペン郷土のスケッチ

晩鴉の群を吐きさりて
夕に消え行くライヘン シュタイン
たんねの森を貫きて
走る溪流音まさる。

あゝ 黯然として思にこもる
天外の嶺、巨大の姿
歡樂極り哀情多き
人界のよそにたちはなれ
雲に纏はれ星に照され
夜なく、銀漢のしづくを浴びて
劫灰の外に消残る
巨靈今さら何のいたみぞ。

雲を吐きては月に送り
 月を吐きては流に送る
 峻嶺こゝに何をか待てる、
 永く潜めてふところ
 はぐくむ思空劫の
 曉高く飛ばしめて
 あらたに来る乾坤の
 若き姿を歌はんとすや。

○ 夕日さめゆくアベルの湖上

さいなみしづまり風收まり
 暗にまぎれて『さびしみ』は
 ひそかに暮煙の外にさまよふ。

○ アベルの湖上白雲泛ぶ
 依々たる残月五更の曉
 露は長空を清く洗ひて
 旅人の夢はまださめやらず。

○ 白馬をかりて緑野をわたる

たそや天地の有情の春に、
エンスの流水ながれ深し
アルペンの嶺雪白し。

○

麓の大野一面に
ちさき光の金蓋花
仰げば千載不盡の雪を
のする秀麗のアルペンの嶺
花いたづらに小ならず
嶺いたづらに高からず。

一陣また一陣
雲は迷ふサンゴタールの險
曉くらく大雨烟る
山靈われを憐みて
此奇を示すや、あらはし飛びて
靈の如くにふあなた
千仞のきりぎりし霧にかくれ
○ 天半とぎれの大瀑かゝる。

○

陰雲忽ち湖面にわきて
 狂うて嶺に舞ひのぼり
 飛鳥の翼たゆくして
 わらしに吹かれたちろくか
 殘照西に死するが如く
 慘憺の色かすかにも
 波をてらして舟さびし
 漁人はいづくに今向ふ。
 ○
 觀ずれば萬象ことごとくしづか

漣漪織り成すレーマンの
 湖上正しく帆ははしる、
 烟に淡きアルペンの嶺
 萬古の雪をいたゞきて
 連綿遠く湖上にのぞみ
 限るかあらしの吹きくる路を。
 ○
 レーマンの湖上一輪満ちぬ、
 散らすは金波銀波の花
 風は今遠くアルペンの

夜半の宿に歸りしや、
なごりかすかの吐息のみ
汀に残る舟べりに。

○
夜半にかすけき一抹は
ヂユウラの嶺か、月光に
佇み立てば露涼し、
夜半に人はまだ寐ねず
つかれし帆を巻き舟こぎかへす、
雲なし風なし北斗高し。

○
ニオンの汀、残照に
白雪嶺の紫を見よ、
レーマンの水風吹きて
さ々なみ織るや幾萬重。
ほどなく夕日あと消えて
一輪満ちし銀盤の
姿故山に見しがまゝ、
あゝわが旅もまた長し。

○
 陰雲慘として冰河にかゝる、
 空劫いづれの時までか
 山靈神秘をひろむるや、
 かなた虚空をつんざくは
 エッターホーン一萬尺
 青苔あつき巉巖の
 罅隙幾多の瀑なして
 下界戀ひつゝ落ち來る。

○
 アイゲル、メンク、エングフラウ
 三峯竝びて天をつんざき
 極暑八月嶺皆白く
 時に遠雷の音なして
 なだれはげしきアバランチ
 さながら大瀑落ち來る姿
 或は天上魔軍の敗れ
 亂れて下界に落ちくる姿。

岡法學士の米國遊學を送る

○横濱の埠頭はなれてひんがしに

火輪波切る三千里

自由の邦にますらをは行く

○陋習の久しきいまだ世に絶えず

『時』にまかしてしばらくは

自由の郷に術琢かむか

○『神』『祖國』『人道』の三つ夜に日に

忘れそ健兒塵の世の

濁浪高く空拍つべきを

○『待つを知れ』聖のをしへを心せよ

奴隸の土下座やみてより

わが國未だ百年ならず

○三千里太平洋の波廣く

日いづるごとに思ひでよ

大八洲國父母の邦

○東西ひがしにし高たかき嶺たかねより大空の

澄めるひとつの月を見よ

『敬天愛人』道こゝに盡く(大正七年一月廿六日寺内内閣の時)

青春の意氣(赤門學生に與ふ)

言論と思想の自由、光明の

流あまねく布くところ

魑魅魍魎の逃げ散るを見よ。

その夕、光焰爛とかっやきて

デモクラシーの聲あぐる

青春の意氣空も焼くべし。

その夕、空に星照り、地に若き

「未來の望」幾千の

聲一齊に自由の凱歌。

東方の眠久しき邦の子ら

今燦爛の新たなる

光明に覺む、嬉しからずや。

曲學と阿權と、微と奸佞と

力あはして塞ぎたる

世界思潮の波ほとばしる。

空涵す世界思潮に身をのせて
示威の運動今見るか
至高學府の青年の意氣。

光明にさめし未來の國士なる
幾千のむれ義に勇み
自由のために博士を衛る。

あら嬉し閥族毒を吸ふ處
毒の獨國倒れたる
此年見たり青年の意氣。

世は移り時は過ぎ行く、いつ迄か
意氣の青年閥族の
奴隸となりて身を狭むべき。

盛なり青年の意氣、此邦の
望みなんちの雙の肩

仰げば旭日あけひ十丈高し。

閥族の垣と呼ばれし不祥の名
今こそ灑げ、赤門の
健兒の意氣を心より歌ふ。

權勢の前に土下座を強ひられし
時を隔つる五十年
奴隸の夢は永かりしかな。

『民は本』千載不磨のおほいなる
眞理なにとて昨日まで
なほ訝れる者の残りし。

權勢の前に久しく閉ぢられし
扉ひらけて光明は
十方照す、嬉しからずや。

大空にかゝる七の彩よりも
いみじ、地上の青春の

新たの叫び——世は改る。(一九一八、十一月中央公論)

ベルジアム

嗚呼レオニダス三百の
寡兵ひきゐて百萬の
ペルシヤの軍に手向ひし
テルモピリイも物ならじ。
英武義侠のアルベール
寶劔鞘を走るとき
砲火ひとしく空に燃え

リイジ、ナミュルしばらくは
怒潮と溢れ大山の
寄するが如きチュウトンの
無道の兵を防ぎしよ。
衆寡敵せず國破れ
老幼男女よもに散り
彈丸黒子一塊の
土地をとゞめし無念のうらみ。
五年のあした光明の
曙さめてよみがへる

邦、靈鳥のフエーニクス
死灰の外まに新たなる
姿現じて全歐の歡呼の中に翔けり舞ふ。(一九一八年、十二月)

オウストリヤの運命

神聖羅馬帝國の
源流遠く史にのぼる
光榮のはてダニューブの
水冷かに風寒み
殘月の影青白く

カーレンベルグの頂に
死せるが如く今やかゝらむ。

犬牙互に錯綜の
あつと見る如く民族の
けじめ、あまりに多くして
魔女の鼎を見る如く
混擾と紛亂と鬭争と陰謀と
想像の限り極めたる
禍深き邦家の姿。

先帝の齡八十五
 九五の寶位王冠の
 重きは苦惱、一代の
 跡ことごとく憂のみ、
 はてはホスニヤ一偶の
 空一彈のひびきより。
 世界を包む火焰ののろひ。
 ハブスブルグの光榮の

返ると見しも秋の夢、
 大亂五年土崩の姿
 虎狼を伴の運命を
 何の言葉に悲まむ
 あゝ一代の——一國の
 無慚の犠牲明日はた如何に
 (一九一八年十一月)

弔 芳 魂

陰雲凝りて寒光しづむ

東北の天地雪に埋れて
ゆふべ傷心のおとづれを聞く。

嗚呼須磨の浦

波や凍らむ

千鳥や鳴かむ

松や咽ばむ。

生きては褒貶あらしと騒ぎ

逝きては幽明霧と隔たる

一代の善才錦繡の粧

孔雀のほこり、珠玉のひらめき

海棠の榮、牡丹の富貴

花か紅に紫に、生ける文章生ける詩歌

風月いくたび舞殿の袂

かへせば湧きくる無韻の哀思。

一代の視聽かくして集め

矯名あまねく梨園を壓して

青春の血を涌かしめし

それも夢なり——雲こぼる。

「批評よ、しばらく目を閉ぢよ、
 無底の幽淵花魂を吸ひて
 永遠不可知の神祕の前に
 うつむく姿——紅血を
 染むるが如き一條の恨も長き末にかゝれる。

おほいなるかな「死」の力、
 海の内また海の外
 おほいなる事繁き時
 「天下の耳目」一齊に

競ひて魂のあと弔ひて
 埋め盡せし幾段の欄ぞ。

おほいなる年、大正の
 八年——西暦數へきて
 一千九百十九年
 歐亞の大地震はしめ
 一千万の屍を築き
 三千億の財を盡し
 ホーヘンツォレン、ロマノフと

ハプスブルグの權能を
 あらしに亂るる枯葉の如く
 大地のおもより拂ひ去りし
 大戦亂のあとひそめ
 更に新たにおほいなる
 建設の基おかるべき年。

百の民族精を抜き
 粹を選びて送り來し
 一代の巨星光さほひて

滿城の春霞むべきエルサイユ城充たす時。

威容あらたに整ひし彼れ大英の大宰相
 北米無冠の王と共に、
 更に瞿鏢のクレマンソウ
 三寸の舌風雲を猶ほ捲くに堪ふ老雄と
 共に世界の經綸の基おくべく語る時
 一言一句千萬の民の運命制すべき
 飛電のたより紛として東海の空によする時。

明鏡、寶劔、珠玉の理想
 抱きて春秋二千年
 東亞のすみに影潜め
 しらずくゝに天職のいたるを待てる此邦の
 英靈長き眠を破り
 黎明の光あらたに仰ぎ
 奴牖の束縛たち切りて
 世界思潮のおほいなる流に投じ進む時。
 バンドウラの匣ならず
 傾け来る光明と希望の寶拾ふべく

樂觀の目の見張る時。
 更に懷疑の目より見て
 晴かわらしか霧か雨か
 七彩いろどる虹霓か
 轟雷孕む陰雲か
 邦の運命皇天の愛か詛か冷眼か
 いづれと思ひ悩む時。

そのおほいなる年新た
 屠蘇の芳醺紅潮の頬にある時忽として

曉寒く碎けし香魂
環珮むなしく歸りきて

(そのあけぼのの鐘や聞く)

關山の雪梅を封じて

恨も深き人の世の

哀れ弔ふとや一代の

視聽ひとしく渺たりし女優のあとに曳かるるよ。

三萬の鐵騎朔北に夜半のねむり成らぬ時

南溟の月冷かに猶朦朧を照す時

廟堂の中平民の宰相勉めて治をはかり

飢と寒は邦の本民に無かれと勵む時

さはれ瑞穂の邦にして黄金の波満ちながら

糧は乏しと訴ふる聲のますます上る時

時世の運をさかさまに刑餘の奸邪回る時

慢か忌憚か冷淡か輿論こゝには黙す時

黷と陳腐と蒙昧と過去の亡靈一堂に

頭集めて九泉に秦の始皇を起すべく

東亞の民の人面の統一の法計る時。

それとは見へで天上に嘯きひかる月球の

力に起る干満の潮の流寄る如く
世は紛として事繁くおほいなる業群がりて
東西ひとしく目を見張り耳飛ばすべき今の時。

おほいなるかな「死」の力

くしくも偉なり「情」の聲

廣き八州ヤマトの中にして

磨の浦波咽べりの

たよりひヒかぬ郷も無し。

一雙の明眸秋の水
恨堪へしいやはての
寫影——はたまた慇懃の
思をこめし文を見よ
鉛華粧ひて明鏡に
とめしいまはの身だしなみ
粧はぬものは愛の聲

『海より深き恵ある
師に背きてもすがりきし

人さきだててながらへじ、
塚を共に』と綿々の
願を残す筆のあと。

(其師に永く譽あれ、
藝園とこしへに香を吐きて
名花にははむ有象うしやうの歌樂
その本深く培へる
辛酸のあと神は知る、
梨園の弟子散じ行き

なかば開きし花ちれど
恩にそむくを猶懷ふ
情藍田の珠に似つ、
黄沙白草朔漠の
月に老將の歌ふ如き
なほ萬斛の熱涙を
無形の絃にそゞくべく
斯文の庭に逍遙の
勳業長し四十年
天爵高く光照り

青史不朽の名を載せむ。

批評しばらく目を閉ぢよ

情海の波瀾底知らず

(その人ならで何ものか潜りてあとを窮めしや)

幽を穿ちて微をわかち

理性するどき一代の

才人長く學を棄て

目を極れば風塵暗く

誹謗のあらし耳にして

師を棄て名を棄て恩愛の

妻子を棄て、一塊の

むくろゆだねし『戀の宮』

二十四番の春の花

盛りはよしや夢といへ

一壺の天地甘きを湛へ

月明梨園花落つる時

秋風旅館雁渡る時

愛と藝術渴仰の

的と眺めて過ぎ來しや。

五年にわたり世をゆりし
 大戦亂の終れるに
 さきだつ日數六にして
 病の床に一瞥の
 最後の別告げも得ず
 毀譽の重きを負へるまゝ
 忽然として愛人の
 逝けるその夜半斷腸の
 叫び何等の無韻の詩

別れし鴻離れし鸞
 悲風怨雨の吟にして
 石を打つべく手を舉げし
 道學しばし目を閉ぢぬ。
 ヘスチングスの戰場に
 王ハロードのなきがらを
 探りあてしは何人か
 愛はすべての謎を解き
 愛はあらゆる罪詫びむ。

女羅纏はりし百尺の
 松倒るときは秋は盡く、
 千鳥に深くる須磨の浦
 あらしもたよる術なけむ、
 さのふは蘭麝君のため
 脂粉これより誰粧ふ、
 今悽慘の目に寫る
 世は荒涼の大沙漠
 目を閉ぢ暗にさける時
 遠くかすけく魂招く。

世の偽に汚されし
 『死なば共に』のかねごとを
 果さでやまじ情に生き
 情にたほれてやみぬべき。
 舞殿の夜半霜寒く
 愁に曇る電燈の
 光り陰火の青き見む、
 幽蘭かくて碎かれて
 香を曉の風に寄す。

世間の「道」を破りたる罪か斷腸夜半の叫
 愛の理想に殉したる恵か情海不滅の名
 報か恵か誰か斷ぜむ。
 わゝあゝ World-wearied ワールド エアライイド flesh フレッシ
 絆を解きて 光の
 すびきあしたの風に飛ぶ
 芳魂しらずいづくにか去る。
 嗚呼明眸と豊頬と娥眉と碎けて地にまみれ

灰と残りて萬有の巨大の胸に歸るとき
 かれも褪め行く虹霓の絶え絶えの橋空に見る。
 「信」の光は薄うして
 「否定」の眼まみは冷かに
 三尺の墓笑ふとも
 起ちて夜半に光芒の
 震ふ北斗を仰ぐとき
 人籟やみて咆哮の
 あらしに翔くる靈の聲

膝つく魂に何を説く。
しばらく堅き幻影の
壁貫きて浮びくる
幽淵の影ほのみする
おほいなるかな「死」の力。

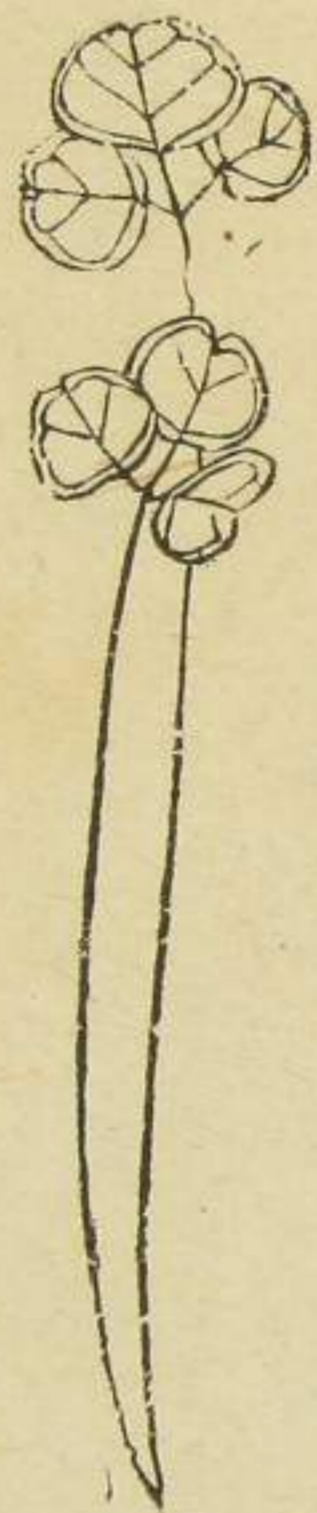
世は黄金の力満ち
人は虚榮の夢深く
虚偽と姑息と形式と
阿諛と軽浮と顛倒と

寄りて赤裸の純眞の
相を光をかくす時
其まのあたり闘を
挑むが如き心血の
凝り成す誠こゝに見よ
『脆し』女性の名なりせば
『強し』『いみじ』は其異名
裙釵いまさら顧みて
天の微妙の寵知らむ。
金鐵碎く堅剛の

情の威力に名を救ひ
 罪を償ひ、さきだちし
 情人の名をまた救ふ
 おほいなるかな「死」の力。
 今逝く魂のあとたどり
 もの一切の疑を
 拂ひて幽冥測りなき
 神祕の門にたちとまり
 身をひれふしてへりくだる
 涙と共に祈るとき

時間空間一切を
 貫き渡る大靈の
 聖のいふさに扇がれむ。

(一九一九、一月)



大正八年五月六日印刷
大正八年五月十日發行

曙光
定價 金壹圓廿錢

著者

土井林吉

發行兼
印刷者

金港堂書籍株式會社

代表者

原亮一郎

發行者

藤原佐吉



發賣所

仙臺市大町四丁目百七十七番地
振替貯金口座
東京一〇六四四

金港堂

(刷印社會株式會社)

